

FESTIVAL/TOKYO

フェスティバル / トーキョー 20 事業実績報告書 2021.3

Festival/Tokyo 2020 Activities and Results Report March 2021



F/T20 想像力どこへ行く?

ふだんとは違う人の移動や出会いが起こる機会になること が、フェスティバルの大切な機能のひとつだと、F/Tでは考えて きました。ところがご存知のとおり、そうした行動が極端に難し くなる事態が、今年になって世界的な規模で起こっています。

こんな状況だからこそ、想像力が大事だと、誰もが思っているは ずです。しかし想像力は、そう都合よく働くものとはかぎりません。 手に負えない想像力がわたしたちを食べてしまうこともある。

それでも想像力は止まらないし、想像力によって救われること があるかもしれません。ヒトの世界でこんなことが起こり、から したちを置いて。わたしたちを連れて。





フェスティバル/トーキョーとは Festival/Tokyo

フェスティバル/トーキョー(以下F/T)は、同時代の舞台芸術の 魅力を多角的に発信し、社会における芸術の新たな可能性を追求 する都市型フェスティバルです。

2009年の開始以来、国内外の先鋭的なアーティストによる演劇、 ダンス、音楽、美術、映像等のプログラムを東京・池袋近郊エリアを 拠点に実施。F/Tでしか出会えない国際共同製作をはじめ、劇場 やまちなかでの上演、世界各地の新しい潮流の紹介、市民参加型の 作品など、多彩な体験の場を生み出しつづけてきました。2016年か らは東京芸術祭の一部として、幸福な出会いに満ちた、よりジャン ル横断的な創作を紹介することに集中しています。

通算13回目の開催となるF/T20は「想像力どこへ行く?」をテーマ に、新型コロナウイルス感染症対策を実施した新しい上演・配信スタ イルを探りながら、令和2年10月16日(金)~11月15日(日)までの31日 間にわたり、都市でこそ可能な創造と祝祭のかたちを追求しました。

※本書では、劇場や美術館など特定の施設外で行われる屋外プロジェクトの説 明で「まち」や「まちなか」という表記を使用しております。

Presenting a wide and exciting range of contemporary stage performances, Festival/Tokyo (F/T) explores new social possibilities for art through the model an urban performing arts event.

Launched in 2009 and held every autumn mainly in the Ikebukuro area of Tokyo, the festival features a lineup of theatre, dance, music, visual art, film/video, and more by cutting-edge artists from Japan and around the world. With unique international co-productions, performances staged in theatres and other locations around the city, showcases of exciting new trends from across the world, and participatory events and projects, the festival has continued to serve as a platform for vivid and varied experiences. Organized as part of Tokyo Festival since 2016, F/T focuses on interdisciplinary work brimming with incredible encounters. For its thirteenth edition, F/T20 was held with the theme of "Whither Imaginations?" over thirty-one days from Friday, October 16 to Sunday, November 15, 2020, pursuing the kind of creativity and festival only possible in a city.



	F/T20 想像力はどこへ行ったか ディレクター 長島 確、共同ディレ F/T20: Whither Did Imaginations Go Kaku Nagashima (Director), Chika Ka
2	概況 Overview
3	事業報告詳細 Festival Activities
	3-1 上演・配信プログラム Performance & Streaming Progr
	3-2 教育普及・研究開発プログラム Education & Outreach / Researc
4	 収支、動員数、チケット Earnings & Expenditure / Audience 4-1 F/T20収支 F/T20 Earnings & Expenditure 4-2 動員数 Audience Numbers 4-3 チケット Tickets
5	広報、宣伝 Publicity & Promotion
6	来場者アンケート Audience Questionnaire
(7)	開催概要、クレジット一覧 Festival Outline & Credits

) ンクター 河合千佳 ·o?	р	. 4
Kawai (Co-Director)		
	р	. 8
	p.	10
gram		
rch Programs		
e Numbers / Tickets	p.	34
e		
	p.	36
	р.	41
	•	
	p.	42

F/T20 想像力はどこへ行ったか ディレクター 長島 確、共同ディレクター 河合千佳 F/T20: Whither Did Imaginations Go?

Kaku Nagashima (Director), Chika Kawai (Co-Director)

2020年が歴史と記憶に深く刻まれる年になることは間違いありませ ん。1月中旬から話題になり始めた新型コロナウイルス感染症 (Covid-19)がみるみるうちに拡大し、3月には欧州が極めて深刻な状況 に陥りました。日本でもクルーズ船での集団感染、学校の一斉臨時休 校があり、4月には緊急事態宣言が発令されました。劇場を含むさまざ まなイベントが中止または延期に追い込まれ、夏に予定されていた東京 五輪の1年延期も決まりました。人や物の移動をたやすくし、加速させ続 けてきた現代社会の利便性が、そのままウイルスの伝播を後押しするこ とになり、健康と生命を守るために世界の行動規範が一変することにな りました。

このような未曾有の状況に直面し、世界各地の芸術祭が軒並み中止 や延期となるなか、フェスティバル/トーキョーは春先から、秋の開催へ 向けて実施可能な形を積極的に探すという方針を立てていました。平 時の通り強行するという意味ではありません。事態が短期には終息しそ うにないのであればなおさら、こんな状況下でも可能な形を柔軟に探る ことにこそ、社会におけるアートの役割があると考えたためです。

そこで今年のテーマには「想像力どこへ行く?」を掲げました。体の移 動が著しく制限されるなか、想像力がさまざまな着地点を見つける機会 となることに、開催する意義があると考えました。

実現へ向け、具体的に探るべき方向が2つありました。ひとつは、「密」 を避け感染リスクを抑えつつリアルで集まる方法を探ること。これは、 劇場で客席数を減らすといった対策から、屋外で体験する作品の形態 自体を発明することまで含みます。もうひとつは、デジタルツールの可能 性を探ること。映像配信やウェブ上での創作および鑑賞体験を試すこと です。個々のアーティストごとに、状況に応じた積極的な変更や対策を、 プランB、プランCあたりまで視野に入れ検討していきました。

アジア圏で招聘予定だった2組のアーティストは、比較的早い時点で 渡航を断念しました。シンガポールのテアター・エカマトラは、当初計画 していた作品が多国籍のキャストだったため、渡航禁止となると集まる ことすらできず、別作品に変更しました。「Berak」は3月の時点での彼ら の最新作で、初日目前で中止となった舞台を急遽映像に収録し、F/T に向けて編集し完成させたものです。映像化に際して、通常の上演の記 録とも映画の文法とも異なる、演劇的な想像力に支えられた独特の表 現が生まれ、「トランスクリエーション」という彼らの技法の新たな成果と もなりました。あわせて制作したショート・ドキュメンタリーも、この状 況下でのメンバーの思考がわかる貴重な資料でした。

韓国のキム・ジョンは、昨年に続き松井周と組んで新作を上演予定で したが、映像配信に切り替えました。キムの提案したストリンドベリ『夢 の劇』を原作に松井が書き下ろした『神の末っ子アネモネ』は、神の娘を 自称する主人公が、コロナ禍をも思わせる人間世界をサバイバルする物 語で、キムと松井の信頼があってこそ成立したコラボレーションでした。 韓国のキャスト・スタッフによって京畿道の劇場で撮影された映像はス ケールが大きく、エネルギーに満ちた舞台上の演技・演出と、意図的に 映し出される空っぽの客席との対比が今年を象徴するようで、胸に迫る 作品でした。映像配信という異例の形で、キョンギドシアターカンパニー との国際共同製作が実現できたのも嬉しいことでした。

これら2作品については、配信にあたり多言語の字幕を用意したことで、 海外からの鑑賞者の獲得にもつながり、今後に残る財産ともなりました。

もう1人の海外からのアーティスト、ファビアン・プリオヴィルは奇跡的

Without doubt, 2020 is a year that will be deeply inscribed in history and memory. Already a big news topic from mid-January, the novel coronavirus quickly spread and by March, the situation in Europe had become incredibly grave. In Japan, we saw mass infections on a cruise liner, schools close, and then a state of emergency declared in April. Various events, including those held in theatres, were forced to cancel or postpone, and the Tokyo Olympics planned for the summer were moved back a whole year. The convenience of contemporary society, where the movement of people and things is easy and has continued to accelerate, escalated the spread of the virus, with the result that the world's code of conduct changed radically in order to protect people's lives and health.

Faced with these unprecedented circumstances, and with art festivals across the globe canceling or postponing one after the other, Festival/Tokyo was from early spring planning a course of action whereby we proactively searched for possible ways to hold the festival in the autumn. This was not about pushing ahead with the festival like business as usual. It was precisely because the situation did not seem likely to end in the short term that we felt that there was a role for art in society to search flexibly for possible ways.

As such, "Whither Imaginations?" was chosen as the theme of the festival. We thought that there was meaning in holding the festival in that it would become an opportunity to examine the various destinations for our imaginations while we were so physically restricted from moving.

To make the festival a reality, there were two concrete direction we examined. The first was to explore ways to actually gather together while avoiding clusters and keeping the risk of infection in check. This includes such measures as reducing the number of seats in a theatre and inventing formats for a performance work that is experienced outdoors. The other was exploring the potential of digital tools. This means video streaming as well as endeavoring to create and watch works online. We asked the individual artists to consider proactive changes and measures according to the circumstances, and even come up with several alternative plans.

Two of the artists we had intended to invite from Asia decided from a comparatively early stage that they would not travel to Japan. Since Singapore's Teater Ekamatra had originally planned a work with a multinational cast, the travel ban meant people were unable even to meet up, and so the company changed to another work. Teater Ekamatra's latest work at the point in March when its run was canceled just before the premiere, "Berak" was instead quickly filmed by the company and edited for showing at F/T. When adapting the production for filming, a unique form of expression emerged that was supported by a theatrical imagination and was distinct from the grammar of both a film and a regular filmed stage performance, thus becoming a new achievement of the company's signature "transcreation" approach. The short documentary Teater Ekamatra produced was also a valuable resource providing insights into the members of the company's thoughts during these circumstances.

South Korea's Kim Jeong had planned to stage a new work with Shu Matsui, following their partnership last year, but the production was changed from a live performance to a video streaming. Written by Matsui and based on Strindberg's "A Dream Play," as proposed by Kim, "Divine Daughter Anemone" was the story of a self-proclaimed daughter of a god, who has to survive in a human world that is reminiscent of the coronavirus pandemic. This was a collaboration made possible because of the dependability of Kim and Matsui. Filmed by a Korean cast and crew at a theatre in Suwon, Gyeonggi Province, the video felt large in scale, a moving work in which the contrast of the highly energetic onstage acting and directing with the intentionally shown empty auditorium seemed to symbolize 2020. It was wonderful to achieve an international co-production with Gyeonggido Theater Company in the exceptional form of a video streaming.

With these two productions, we were able to prepare subtitles in multiple languages for the streaming, allowing them also to reach viewers outside Japan, and ensuring they become assets that last.

One artist from overseas, Fabien Prioville, was miraculously able to come to

に来日が叶い、日本のダンサー 4人とヴァーチャル・リアリティ(VR)技 術を使ったダンスの映像作品『Rendez-Vous Otsuka South & North』 を予定通り製作できました。VR技術を、別世界にトリップするためでは なく、いまいるその場所こそを体験するために使うというコンセプトが面 白く、だからこそ現地での撮影が不可欠でしたが、感染状況のタイミン グにも助けられ、無事に実現することができました。駅前広場トランパ ル大塚と、星野リゾートOMO5東京大塚という個性的な会場の特性を 生かし、現地でVRゴーグルを被って1人で鑑賞することができる本作は、 劇場に来なくてもダンスを体験できる機会として、「出会い」を意味する タイトル通りのすばらしい作品となりました。地元の方にも早朝のラジオ 体操の後にエキストラで出演していただけました。

タイのバンコク国際舞台芸術ミーティング(BIPAM)との交流プログラ ム『The City & The City: Divided Senses』も、当初はバンコク一東京 間での直接の行き来を想定していましたが、全面的にオンラインに切り替 えました。国と国では大きすぎるので、都市と都市の間で交流を図るプロ ジェクトとして、それぞれ3人ずつのアーティストを選び、リサーチのプロセ スを交換していきました。すべてオンラインで行った交流が予想以上にう まく行き、両チームが影響を与え合う化学作用が起こりました。最終的に それぞれリアルな会場で展示を行い、これも直接はお互いに訪れ合えな い形でしたが、交流プログラムとして大きな手応えがありました。プロセ スに付き添い支えてくれたコーディネーターの力も大きかったです。

『Voices in the Time of Pandemic』はオンラインでのもうひとつの試 みで、過去の「アジア・シリーズ」「トランスフィールド」参加アーティストに 声をかけ、それぞれの現状を映像で伝えてもらう企画でした。急なリク エストだったにもかかわらず、懐かしい面々の真摯な声や演奏を聞くこと ができました。これと前述のBIPAMとの交流、そしてエカマトラの作品 は、今年すべてオンラインになりましたが、国際交流基金アジアセンター の助成を受けた「トランスフィールド」という枠組みの新たな成果でした。

一方、劇場作品にも収穫がありました。モモンガ・コンプレックス『わたしたちは、そろっている。』はソーシャル・ディスタンシング時代のオペラとでも呼ぶべき大作で、劇場内に配置されたパフォーマーのブースの間を自由に回遊して体験するリアルの上演と、複数のカメラを切り替えながら休憩時間まで見せるライブ配信の2パターンの鑑賞方法が用意されました。アーティストチームはこのイレギュラーな形を生み出すのに極めて積極的で、結果としてどちらも非常に充実した試みになりました。タイトルが示すように、互いに触れ合うことのできない今年の状況下で、それでも人が集えるのかという問いへの、ひとつの回答だったといえます。

村川拓也『ムーンライト』はドキュメンタリー的な手法を用いた作品で、 2017年の京都での初演から3年後の再演でした。ある年配の男性の実 人生が、本人と村川との対話を通して舞台上で語られていくのですが、 実話ゆえのエピソードの強さと時の流れの残酷さが浮かび上がると同 時に、プロではなくとも自ら演奏し、音楽に親しむことが、人びとの人生 をどれほど豊かにするか、観客は再認識させられたはずです。舞台に は、子供から大人まで、東京のピアノ教室の紹介で集まった東京在住の 方々も出演しました。その方たちら今年演奏会の機会を奪われていたた めに、演奏に意気込みと喜びが漲っていました。モモンガ・コンプレック スと比べると極めてオーソドックスな劇場の使い方の作品で、客席を大 幅に減らしての上演でしたが、感染の状況がやや好転し、いくらか増席 して当初の予定よりも多くの方に見てもらうことができたのは幸運でし た。

まちなかでは2つのプログラムを昨年から継続して実施しました。 Hand Saw Pressによる『とびだせ!ガリ版印刷発信基地』は昨年大成 功した「期間限定の印刷所」の2年目で、大塚の店舗を拠点にしつつ、密 を避けるため印刷機をのせたトラックで公園などに出張しました。また 豊島区内の図書館や全国各地の書店とも連携し、原稿を募集したり完 成したZINEを配架したりと、昨年よりいっそう広い交流のネットワーク が実現しました。このプログラムはアーティストとは限らない人々の表現 Japan and, together with four Japanese dancers, created as planned the production of "Rendez-Vous Otsuka South & North," a dance work that uses virtual reality technology. The concept for the work, whereby VR technology is used not to generate an otherworldly trip, but rather to experience the place where you are right now, was intriguing, which made it even more essential to shoot the footage on-site, and we were here helped by the somewhat calmer state of the pandemic at that time and could successfully make the production happen. Harnessing the distinct characters of the venues-the TRAM-PAL Otsuka plaza outside Otsuka Station and Hoshino Resorts OMO5 Tokyo Otsuka-it was a wonderful work that truly was a rendezvous, an opportunity to experience dance without going to a theatre and instead putting on a VR headset and viewing the work by yourself. Locals also appeared as extras after their early morning radio calisthenics.

For "The City & The City: Divided Senses," our exchange project with Bangkok International Performing Arts Meeting, we had at first anticipated directly traveling back and forth between Bangkok and Tokyo, but the whole project was shifted online. A project attempting to engage in exchange between cities, since the scale is too large if between countries, each partner organization chose three artists, and then exchanged the research processes. The interaction that was entirely online went better than expected, and chemical reactions occurred in which the two teams mutually influenced one another. Eventually, the partners held exhibitions in their respective offline venues, and while the participants were once again unable to visit each other directly, the response was strong as an exchange project. The efforts of the coordinators were also incredible.

"Voices in the Time of Pandemic" was another online endeavor in which we contacted previously participating artists in the Asia Series and Transfield from Asia, asking them to contribute a video conveying their present circumstances. Notwithstanding the sudden nature of the request, we were able to hear the contributors' sincere voices and performances that brought back memories. This, the aforementioned BIPAM project, and the Teater Ekamatra productions were all online, but represented a fresh achievement within the framework of "transfield" that was supported by a grant from the Japan Foundation Asia Center.

On other hand, the year's haul also included productions performed in theatres. Momonga Complex's "We assemble together" was a monumental work that we might call an opera for the age of social distancing, set up so that it could be viewed in two different ways: as a performance experienced in person while moving freely among the performers' booths arranged inside a theatre; and as a live stream switching between multiple cameras, and showing even the intermissions. The artist team was remarkably proactive about creating this irregular format and, in terms of the results, both proved extremely accomplished endeavors. As the title suggests, the production was a response to the question of whether people are still able to gather together during the situation in 2020, when we could not come into contact with others.

Takuya Murakawa's "Moonlight" was a documentary theatre work, revived three years after its premiere in Kyoto in 2017. The actual life of an elderly man was related onstage through a conversation between the man and Murakawa, bringing out its power as a true story and the cruelty of time, yet his intimacy with music, even as an amateur, simultaneously giving the audience a renewed realization of just how rich human life can become thanks to art. The onstage music recitals were performed by Tokyo residents of varying ages, all members of a local piano school and who, having been deprived of their chance to hold a regular recital this year, gave performances replete with zeal and joy. In comparison with Momonga Complex's, the use of the theatre space was far more orthodox, and the audience seating was heavily reduced for the performance, and yet we felt very fortunate that the state of infections had somewhat changed for the better, and we were able to add more seats and show the work to as many people as we could.

This year, we once again had two productions held in and around the city. Following its success at the 2019 festival, "Pop-up Riso Zine Studio" by Hand Saw Press was a print studio that was held this year in two shops in the Otsuka area of Tokyo and, in order to avoid clusters, also appeared at parks and other locations as a truck with printing equipment, and further, in partnership with libraries around Toshima and bookstores all over the country, we received manuscripts submitted by members of the public and displayed the completed zines, in this way accomplishing a network for even more extensive exchange. This project proved an important opportunity for the festival, brimming with the expressive urges, ideas, and techniques of people who are not necessarily "artists," and as an opportunity for 欲求とアイデアと技術が溢れ出す、フェスティバルにとって大切な場であ り、劇場に来てくれる観客とは別の人々と出会い、公共施設や書店とも 接点をもつ機会として、ふたたび大きな成功を収めました。

もうひとつ昨年から継続した『移動祝祭商店街』は、〈まぼろし編〉と 銘打って、大きく形態を変えました。まちなかでのパレードや大勢の集 まるパフォーマンスが難しいと判断したためです。セノ派のメンバー4人 が「景」を手がかりにそれぞれ独立したチームを作って企画を進め、2つ はリアルで、2つはオンラインで体験できる複合的なプログラムとなりま した。杉山至チーム「その旅の旅の旅」は6人の〈旅人〉が選んだ豊島区 内の48景をカードにし、体験者が好きな順序と組み合わせで独りでも 体験できるまち歩きをデザインしました。佐々木文美チーム「みんなの 総意としての祝祭とは」は大塚のあちこちに〈顔ハメパネル〉を設置、通 りがかりの子供から大人まで、思わず立ち寄るユーモラスな仕掛けを作 りました。坂本遼チーム「Roofing the Roof with a Roof」は南長崎のビ ルの屋上に宙に浮かんだようなリビングルームの舞台美術を設置、映像 を撮影し、閉塞的な日常のなかのエアポケットのような時間を生み出し ました。中村友美チーム「眺望的ナル気配」は池袋本町の住人への取材 をもとに、ミニチュアの舞台装置によるスライドと映像を制作し、あたか も幻の祭のように期間限定で公開しました。これらを体験することで、 今年開催できなかったさまざまな地域のイベントへ想いを馳せつつ、次 年度以降への橋渡しとなるような静かな時間を過ごすことができたので はないかと思います。

研究開発プログラム「アーティスト・ピット」は西尾佳織をファシリテー ターに迎え、計7名の参加者に、ときにゲスト講師2名が加わり、集団内 の力学や活動の持続可能性をめぐる幅広い議論がすべてオンラインで 交わされました。参加者の間では対面でないもどかしさもあったでしょ うが、海外からも参加できるなど利点もありました。同様にシンポジウム 「フェスティバル・アップデート」も完全オンライン開催としたことで、シン ガポール、チュニス、マンチェスターのフェスティバルディレクターを迎え ることができ、貴重な情報交換の機会となりました。会期に先駆け実施 したトーク「ディレクターズ・ラウンジ」も、ゲストとの充実した対話はもち ろんのこと、配信の経験値を上げるのにも役立ちました。教育普及プロ グラム「ダイアローグ・ネクスト」は、オンラインと対面を併用したことで、 台風の影響による中止を回避できるなど、昨年以上に柔軟に実施でき た部分もありました。参加学生たちも交流の機会に飢えていたようで、 このような枠組みを中止にせず維持する責任を感じました。インターン も規模を縮小せざるをえませんでしたが、困難な状況を一緒に経験で きたことは、必ずや未来の糧になると信じます。

総じて変則的なチャレンジをせざるをえない年となりましたが、これ まで書いてきた通り、予想を遥かに上回る収穫がありました。まだまだ 手探りとはいえ、オンラインには劇場とは違うアクセシビリティの可能性 が大いにあり、今年開設したオンライン会場「F/T remote」を足がかり にして、感染症終息後もますます活用すべきと考えます。また一方で、 現地に足を運んでの体験の情報量の豊かさ、かけがえのなさも痛感す ることになりました。安全を優先しながらも対面の機会は絶やしてはな らないし、そのための工夫こそが感染症の時代における新たな創作の糧 となるはずです。

フェスティバルは会期中のみならず、準備や閉幕後の時間も通して常 時機能している異種交流のプラットフォームでもあります。そこには国内 外のアーティストから観客、スタッフ、サポーター、まちの方々、専門家、 行政の職員まで、さまざまな参加者・協力者が、さまざまなタイミングで 関わっています。今年この交流のプラットフォームがトラブルなく維持で きたのは、技術監督をはじめとするスタッフの徹底した安全対策と、す べての関係者の努力と想像力の賜物であり、みながこのような状況下で も何かに出会う希望と期待を持ち続けた結果だと思っています。

ディレクター 長島 確 共同ディレクター 河合千佳 encountering people other than those who go to the theatre, and as an opportunity for building nodes with public facilities and bookstores, once again achieved great success.

Also returning after its appearance last year, "Roaming Shopping Street Festival" acquired a new subtitle-"Phantom Edition"-and drastically changed format. This is because it was judged difficult to hold a parade or performance with large numbers of people in the streets. The four members of Sceno-ha each formed their own teams and proceeded with separate projects taking their cue from the idea of "scenes," and resulting in a compositive set of projects, two of which could be experienced offline and two online. "The Journey to a Journey to a Journey" by the Itaru Sugiyama team put forty-eight scenes from Toshima by six "travelers" onto cards and was designed so that someone could experience the project by walking around the city even alone, freely making their own route. The Avami Sasaki team's "A Festival by Everyone" set up photo stand-in boards at various places around the neighborhood of Otsuka, creating a comic gimmick that passersby young and old simply couldn't help but try out. "Roofing the Roof with a Roof" by the Ryo Sakamoto team installed the stage design of a living room, as if floating in space, on the roof of a building in Minami-Nagasaki. and then filmed this, forming a kind of temporal air pocket within our trapped everyday lives. Based on interviews with Ikebukuro Honcho residents, the Tomomi Nakamura team's "Dioramic Scenes" created slideshows and a short film with miniature stage sets, which was then shown online for a limited period of time like a phantom festival. Experiencing these projects gleaned thoughts on various events in the area that could not be held this year, and brought about a quiet time that formed a bridge to next year and beyond.

The Research Program's Artist Pit welcomed Kaori Nishio as facilitator and a total seven participants as well as two guest lecturers, whose wide-ranging discussions on group dynamics and the sustainability of their activities were conducted entirely online. While there was no doubt frustration at being unable to meet face to face, this approach had the merit that artists based overseas could also participate. Similarly, the "Festival Update" symposium was held completely online with festival directors from Singapore. Tunis, and Manchester, and proved a valuable opportunity for exchanging information. The Directors' Lounge talks that got started ahead of the festival featured a series of rewarding conversations with guests, not to mention also serving to increase our experience with streaming events. From the Education & Outreach Program, Dialogue Next combined both online and in-person approaches, allowing it to operate more flexibly than last year, such as avoiding the impact of typhoons. The participating students seemed starved of such chances to interact and we felt a responsibility to keep this kind of initiative going. We were, however, forced to scale down the internships but believe being able to experience these difficult circumstances together will definitely bear fruit in the future.

In general, it was a year in which we had to undertake atypical challenges but, as we have indicated above, the results were far greater than anticipated. Though we are still very much finding our way, holding events online has immense possibilities for accessibility different from theatres and using the F/T remote online venue that was set up this year as a stepping stone, we should increasingly utilize such means even after the pandemic has abated. On the other hand, we felt keenly the informative abundance and irreplaceable value of actually going to a place and experiencing things face to face. While prioritizing safety, we must not let go of opportunities to meet in person and the means for ensuring this are certain to yield new creativity in the coronavirus age.

A festival is also a platform for different kinds of exchange, constantly functioning not only during the period it is held but also throughout its preparation and after it has finished. And here a wide range of participants and partners, from the Japanese and international artists to the audiences, team of staff, volunteers, locals, specialists, and government officials, are involved with the festival at various points in time. That we were able to maintain this exchange platform trouble-free in 2020 was the result of the measures thoroughly carried out by our technical director and other members of staff, and the efforts and imaginations of everyone involved with the festival, and the upshot of continuing to hope and anticipate that we could somehow meet even under these circumstances.

Kaku Nagashima, Director Chika Kawai, Co-Director



長島 確

立教大学文学部フランス文学科卒。同大学院在学中、ベケットの後期散文作品 を研究・翻訳するかたわら、字幕オペレーター、上演台本の翻訳者として演劇に 関わる。その後、日本におけるドラマトゥルクの草分けとして、さまざまな演出家 や振付家の作品に参加。主な劇場外での作品・プロジェクトに「アトレウス家」シ リーズ、『長島確のつくりかた研究所』(ともに東京アートポイント計画)、「ザ・ワー ルド」(大橋可也&ダンサーズ)、『←(やじるし)』(さいたまトリエンナーレ 2016 /さいたま国際芸術祭2020)、『まちと劇場の技技(わざわざ)交換所』(徳の国と よはし芸術劇場 PLAT)など。18年度より、F/T ディレクター。東京芸術祭 2018 より「プランニングチーム」メンバー。東京藝術大学音楽環境創造科特任 教授。



武蔵野美術大学造形学部基礎デザイン学科卒。劇団制作として、新作公演、 国内ツアー、海外共同製作を担当。企画製作会社勤務、フリーランスを経て、 2007年にNPO法人アートネットワーク・ジャパン(ANJ)入社、川崎市アー トセンター準備室に配属。新作クリエーション、海外招聘、若手アーティスト 支援プログラムの設計を担当。2012年、フェスティバル/トーキョー実行委員 会事務局配属。日本を含むアジアの若手アーティストを対象とした公募プログ ラムや、海外共同製作作品を担当。15年度より副ディレクター。18年度より、 F/T共同ディレクター。東京芸術祭 2018より「プランニングチーム」メンバー。 日本大学芸術学部演劇学科非常勤講師。

Kaku Nagashima

Graduating with a degree in French literature from Rikkyo University, Kaku Nagashima began to research and translate the later prose of Samuel Beckett during his graduate studies while also working as a performance surtitles operator and script translator. A pioneering dramaturge in Japan, he has worked with a wide range of directors and choreographers in that capacity. His major credits for projects and productions at non-theatre venues include the "House of Atreus" series and Kaku Nagashima's How-To-Make-Laboratory (both for Tokyo Artpoint Project), "The World" (Kakuya Ohashi and Dancers), "YAJIRUSHI" (Saitama Triennale 2016), and "Community and Theatre Skill Exchange" (Toyohashi Arts Theatre PLAT). He was appointed director of Festival/Tokyo in 2018. He is also a member of the Planning Team for Tokyo Festival since 2018 and a special invited professor at the Department of Musical Creativity and the Environment, Tokyo University of the Arts.

Chika Kawai

A graduate of Musashino Art University's Department of Science of Design, Chika Kawai oversees premieres, domestic tours, and international co-productions. After experience working for a production company and as a freelancer, she joined NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ) in 2007 and was part of the team organizing the opening of Kawasaki Art Center. She supervised newly commissioned work, visiting overseas productions, and a support program for young artists. She transferred to the Festival/Tokyo Executive Committee Secretariat in 2012. She has since been involved with international co-productions and open-call programs aimed at young artists in Japan and the rest of Asia. She became vice director of Festival/Tokyo in 2015 and then co-director in 2018. She is a member of the Planning Team for Tokyo Festival since 2018 and also an adjunct instructor teaching theatre courses at Nihon University's College of Art. 「想像力どこへ行く?」をテーマとし、国内外から集結した同時代 の優れた舞台芸術作品を軸に、アートプロジェクト、シンポジウムや 作品への理解を深めるためのトークプログラムなど、上演・配信プロ グラム、教育普及プログラム、研究開発プログラムの三つの柱で実 施した。また、新型コロナウイルス感染拡大を受け、オンライン会場 として「F/T remote」を設け、リアル会場では物理的距離の確保等、 適切な対策を実施しての開催となった。

上演・配信プログラムにおいては、例年のように海外からカンパ ニーごと招聘しての劇場公演が叶わない中で、どのようにして海外 のパートナーと新作をつくるのか、プロジェクトを進行していくのか が大きな課題であった。取り組みとしては、映像作品として編集及 び字幕を付けて配信、オンラインでコミュニケーションを重ねた結 果、アーティストが拠点とする国でのプレゼンテーション実施、VRで 体験するダンス作品が挙げられる。これらの取り組みは、これまで にない選択肢での国際交流を実現したと言える。日本のアーティス トによる、豊島区内のまちなかで開催してきたプログラムは、オンラ インとリアルの2方向を展開。特設ウェブサイトを開設、リサーチに 基づく映像作品の配信や、参加者がウェブサイトと特製の地図を頼 りにまちを歩くことで、新しい景色の切り取り方を提示した。また、 会期中の数週間に渡って、豊島区内の商店街に拠点を設けるプログ ラムでは、トラックで豊島区内の図書館や公園へ出張を行っただけ でなく、各地の書店にも協力をいただき、F/Tを起点とした「フェス ティバルに参加できる」インフラを全国に拡げた。劇場作品におい ては、出演者のパフォーマンススペースを区切るなどソーシャル・ディ スタンシングを盛り込んだ演出やライブ配信、アーティストの活動紹 介の一つとして上演と並行して別作品の解説動画の配信を行った。

教育普及プログラムでは、学生向けのインターンシップ・プログラ ム、ダイアローグ・ネクストにおいて、座学研修やディスカッション部 分をオンラインに移行。また、サポーター(ボランティア)プログラム も、規模を縮小しての実施となった。例年とは異なる形でもプログラ ムを継続することで、フェスティバルへの参加の扉を開き続けること ができた。

研究開発プログラムでは、「ディレクターズ・ラウンジ」とシンポジウ ム「フェスティバル・アップデート」を開催。2プログラムともオンライ ンでの実施となり、シンポジウムは、F/Tオフィスと海外の三つの国 を繋いでの、通訳を挟んでのライブ配信(有料)で行った。さらに昨 年立ち上げた「アーティスト・ピット」では、この状況を受け、全面オ ンライン開催としたところ、海外を拠点とする2人を含む6人の若手 アーティストが参加した。 Exploring a theme of "Whither Imaginations?" and centering on superb productions of the contemporary performing arts from both in and outside Japan, Festival/Tokyo 2020 was programmed across three main areas: performances and streaming, education and outreach, and research. In response to the coronavirus pandemic, the festival set up a new online venue called F/T remote, while also ensuring social distancing at its venues where events were held in-person.

In the Performance and Streaming Program, we were not able to invite companies from overseas to bring their productions to Japan for in-person performances at theatre venues like usual. The festival faced a great challenge in terms of how to create new work with partners outside Japan and how to proceed with projects. As such, performances were filmed, edited, and streamed online with subtitles. Exhibitions were held in partners' respective locations after a process of online communication. A dance work was experienced by audiences in virtual reality. These efforts could achieve international exchange through choices that we didn't have before. For one production by Japanese artists held around Toshima ward, we staged it in both online and offline formats. By launching a special website for the production, streaming video works created from research, and having audiences walk around the district using maps and a website, the festival presented new approaches to "cutting out" the landscape. Another production was held over several weeks from a main base in a shopping street in Toshima, alongside off-site excursions by truck to libraries and parks in Toshima as well as bookstores around the country. In this way, we were able to expand our infrastructure for participating in the festival nationwide while retaining our base in Tokyo. For productions performed at theatre venues, they were streamed live or staged in such a way so as to take advantage of the necessity for social distancing, while a video of a talk about a different performance was streamed in parallel with the staging of the artist's production to showcase his other work.

In the Education & Outreach Program, the student internships and Dialogue Next moved online for their training course and discussion segments. The Volunteer Supporters program was held this year at a reduced level. Even though things were organized in different ways, by continuing to offer the program, we were able to keep the door open to participation in the festival.

The Research Program comprised the Directors' Lounge talks and the Festival Update symposium. Both were held online, the symposium streaming live with interpretation from the festival office and locations in three other countries to viewers (for a fee). Launched at last year's festival, Artist Pit was also held this time entirely online, which meant that artists based overseas could take part. 新型コロナウイルス感染症対策としては、1)来場者様への感染予防お願い、2)会場での感染予防、3)スタッフ・出演者の感染予防 の3つの観点からガイドラインを作成、創作期間・実施期間の感染拡 大予防に努めた。また、東京芸術劇場の「公益財団法人東京都歴 史文化財団東京芸術劇場における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」をはじめとする各会場で設けられているガイドライン を遵守し運用した。

〈主な対策〉

- (1)スタッフ、出演者、来場者に対しての、会場入り口での検温、会場内でのマスクの着用、手指の消毒を実施した。
- (2)下記いずれかの該当者には体調を優先し、業務への従事、来場・ 参加を控えてもらった。
- ・検温の結果、37.5度以上の発熱や咳・咽頭痛などの症状があ る場合。
- ・新型コロナウイルス感染症陽性とされた者との濃厚接触があ る場合。

 ・過去2週間以内に、政府から入国制限、入国後の観察期間を 必要とされている国・地域への渡航、並びに当該国・地域在住 者と濃厚接触がある場合。

〈会場内について〉

- (1) 清掃、消毒、換気の強化、会場内の衛生の維持に努めた。
- (2) 屋外会場の場合は、広さに応じた人数制限を行うことで人の密 集を避け、お客様が触れる可能性のある機材等は随時消毒を 行った。

〈スタッフ・出演者に対して〉

- マスクやフェイスシールド、手袋を着用し、屋内受付など対面接 客が必要な箇所では飛沫防止用パネルを設置した。
- (2) 備品の共有を極力控え、共有するものに関しては都度消毒を 行った。
- (3)上演プログラムにおいて、技術監督監修のもとに消毒備品を配置、舞台裏・楽屋のゾーニングを行い、さらに通常のランニングスタッフとは別に消毒を行うスタッフを配置した。
- (4) 上演プログラムにおいて、出演者とマスクを外す出演者と接する スタッフに関しては、事前にPCR検査を受診した。

〈来場者に対して〉

- (1) 来場者間での適切な距離の確保、及び会場内での会話を控え るように呼びかけた。
- (2) 感染者が見つかった場合に備えて、屋内会場での参加者については個人情報の記入に協力を呼びかけた。
- (3) パンフレット、アンケートへの手渡しを控え、アンケートはQR コード読み込みとした。
- (4) 出演者との面会、差し入れを禁止した。







Coronavirus measures were formulated across three key areas (requests to audiences, measures in the venues, and measures in place for members of staff and performances) and carried out across the period of the festival, including the creative development stage. Internal guidelines were formally established, and the official guidelines and policies at each venue were followed strictly at all times.

Main Measures:

(1) All members of staff, performers, and visitors/attendees had their temperatures checked at the entrance to festival venues, disinfected their hands, and wore masks inside the venues.

(2) In the following cases, people were asked to refrain from carrying out their duties or watching/participating in events:

- If they had a temperature of 37.5 degrees Celsius or above, and/or were exhibiting signs of a cough, sore throat, or headache.
- If they had close contact with people who have tested positive for the coronavirus.
- If they had traveled to/from a country/region within the past two weeks that the Japanese government had either restricted entry from or announced that those entering Japan from the country should have a period of self-isolation, or had close contact with someone residing in such a country/region.

1. Measures in Place at Venues

- Venues were cleaned and sterilized. Ventilation was improved. Efforts were made to maintain hygiene in the venues.
- (2) For outdoor events, the number of attendees was limited as appropriate to the area to avoid clusters, and equipment or items that may come into contact with people were regularly disinfected.

2. Measures in Place for Members of Staff and Performers

- (1) Face masks and shields as well as gloves were worn. Anti-droplet panels were installed at places where face-to-face contact with audiences was required, such as the box office desks.
- (2) Sharing of equipment was minimized as much as possible. For items where sharing was unavoidable, sterilization was carried out at regular intervals.
- (3) For events in the main program, the technical director oversaw the availability of sterilization equipment, and zoning in the backstage area and dressing rooms. A separate team from the regular operations team carried out the disinfecting duties.
- (4) For events in the main program, the performers and members of staff who had contact with performers not wearing masks received PCR tests in advance.
- 3. Measures in Place for Visitors/Attendees
- Audiences were asked to maintain social distancing and to refrain from talking inside the venues.
- (2) In case of infection, audiences were asked to provide personal information to facilitate tracing.
- (3) Pamphlets and questionnaires were not distributed by hand. Audiences instead accessed questionnaires through a QR code.
- (4) Face-to-face meetings or gifts for performers were not allowed.







移動祝祭商店街 まぼろし編 Roaming Shopping Street Festival: Phantom Edition



とびだせ!ガリ版印刷発信基地 Pop-up Riso Zine Studio



ランデヴー・オオツカ サウス アンド ノース Rendez-Vous Otsuka South & North Rendez-Vous Otsuka South & North



神の末っ子アネモネ Divine Daughter Anemone



トランスフィールドfromアジア ベラック **Berak** Berak



わたしたちは、そろっている。 We assemble together

トランスフィールド from アジア

F/T × BIPAM 交流プロジェクト

ザ・シティ・アンド・ザ・シティ

Transfield from Asia, F/T + BIPAM Exchange Project The City & The City: Divided Senses



ムーンライト Moonlight



トランスフィールドfromアジア ヴォイシス・イン・ザ・タイム オブ・パンデミック Voices in the Time of Pandemic Voices in the Time of Pandemic



青年団プロデュース公演 尼崎市第7回「近松賞」受賞作品

Winner of the 7th Amagasaki City Chikamatsu Award

A Day in the Life of Tokusaburo Umadome

Written by Sanae Takayama, Directed by Oriza Hirata

教育普及プログラム ダイアローグ・ネクスト Education & Outreach Dialogue Next

○連携プログラム

馬留徳三郎の一日

Seinendan

作:高山さなえ 演出:平田オリザ

主催:(有)アゴラ企画・こまばアゴラ劇場

Presented by Agora Planning, Komaba Agora Theatre



The City & The City: Divided Senses

ディバイデッド・センシズ

研究開発プログラム F/T20シンポジウム フェスティバル・アップデート なぜ舞台芸術祭をまちなかで? (そしていかにしてこの感染症の時代にさえも開催するのか) Symposium: Festival Update Why hold a performing arts festival "in the city"?

(And how to hold it even in a time of pandemic?)



研究開発プログラム F/T20 アーティスト・ピット Research Artist Pit

10.7(Wed) - 10.11(Sun) 会場:座·高円寺1 公演回数:7回 来場:860名 ZA-KOENJI 1 Performances: 7 Audience: 860



※F/T remoteの詳細はP.24をご覧ください。

移動祝祭商店街 まぼろし編

企画デザイン:セノ派 Roaming Shopping Street Festival: Phantom Edition Project Design: Sceno-ha

F/T19のオープニングプログラムとして地元商店街のリサーチをもと にした屋外パフォーマンス『移動祝祭商店街』を実施したセノ派が F/T20に再登場。舞台美術家の杉山至、坂本遼、佐々木文美、中村友 美の4名が、コロナ禍で集まれなくなったいま「一人でいる方法」をキー ワードに企画を構想、映像やスライド、まちめぐりなどさまざまなプロジェ クトが豊島区内の商店街とオンライン双方で実施された。

Following its appearance as the opening program of F/T19, Sceno-ha's "Roaming Shopping Street Festival" returned with its outdoor performances based on research into local shopping streets. In response to how the coronavirus pandemic was preventing us from coming together in large numbers, four stage designers-Itaru Sugiyama, Ryo Sakamoto, Ayami Sasaki, and Tomomi Nakamura-envisioned various projects inspired by the idea of doing things alone. These unfolded across an online platform and shopping streets in Toshima ward as films, slideshows, and neighborhood walks

....... 移動税券商店用 まぼろし桶 EX PRATING / BRAN

特設ウェブサイト、豊島区内商店街、豊島区内各所、

F/T remote(オンライン会場) 来場:計22,568名

F/T remote (available online) Audience: 22,568

Toshima shopping streets, other locations around Toshima,

Online (special Phantom Edition website),

『移動祝祭商店街 まぼろし編』特設ウェブサイト https://www.scenoha-festivaltokyo.jp/

10.16(Fri) - 11.15(Sun)



その旅の旅の旅 The Journey to a Journey to a Journey

コロナ禍で人が集まることが制限されるなか、杉山至は正岡子規の紀 行文『旅の旅の旅』に着想を得て、ある場所に人々が時間差で集う「旅 の連鎖」の作品化を目指した。まず6名のアーティストが豊島区内で俳句 や音、スケッチなど多様な表現で8つの《景》を素描し、特設ウェブサイト や区内各地の《景ラック》に配架。計48種の《景シート》をたよりに、参加 者は自由に《景》に描かれた場所を訪ね、アーティストの旅を追体験した。 さらに参加者にも《景》の投稿を募集し特設ウェブサイト上で公開した。 誰かの旅の軌跡がさらなる旅を誘引する仕掛けを具現化した。

Amid the restrictions on people gathering together imposed by the pandemic, Itaru Sugiyama took inspiration from a travelogue by the poet Masaoka Shiki, and aimed to create something that realized a chain of journeys where people congregate in a certain place at different times. First, six artists each drew eight "scenes" around Toshima in the form of haiku, sound, or sketches, and these were then uploaded to a special website and to "scene racks" located around the ward. Using these forty-eight "scene sheets," participants were free to visit the scenes as they wished, and vicariously experience the journeys taken by the artists. The participants could then also submit their own scenes, which were shown on the website In this way, the trajectory of someone's journey induced yet more journeys.



Roofing the Roof with a Roof

坂本遼はコロナ禍でコミュニケーションの形が変化する状況を踏ま え、作品と鑑賞者を結びつける新たな表現を検討した。普段は人が入 れない屋上に舞台と客席を仮設し撮影、特設ウェブサイトで配信した。 舞台上では俳優が家族の会話やパーティの他愛ないトーク、ベットで一 人くつろぐ様子などの日常生活の一コマを演じた。終盤には客席に座る 観客の姿が映し出され、上演を観る/観られる2つの視点が交差した。 また屋上から定点観測した南長崎の街並みの変化を、「風景」にまつわ る哲学書の引用とともに掲載した。日々見慣れた風景は他者の視点や 言葉を介すことでまったく新しい景色に変わることを提示した。

みんなの総意としての祝祭とは A Festival by Everyone

佐々木文美は多様な文化・言語・宗教が入り交じる南大塚の地元住民 へ「祝祭」にまつわるインタビューを実施した。この作業を元に構想し、 街中で7本の映像を撮影、国際語として知られる「エスペラント」の同時 通訳を入れた。鑑賞者はこの映像を見るために南大塚の商店街へ出歩 き、各所に設置された「顔ハメパネル」を巡る。パネルに自分の顔をはめ スマートフォンで撮影すると、そこに付されたQRコードのリンクから映像 が再生された。この手法の新奇性と南大塚の街の様子を伝える映像か ら、観客一人ひとりに「祝祭とはなにか?」思考を促す企画となった。

眺望的ナル気配 Dioramic Scenes

中村友美は池袋本町の地元住民に《祝祭や原風景、過去の記憶》に 関するアンケートやリサーチを重ねた。そしてさまざまに異なる記憶をも とに、"架空のまち"を模型として再構築していった。特設ウェブサイト ではこの模型を使用した6つのスライドショーと模型作品の創作プロセ スを通し、全体を眺望できるような擬似体験を短編映像として公開。ま ちを少し離れたところから眺める、あるいは過去や未来を眺める体験か ら、人々の身体の中に《景》が生まれていくプロセス自体を提示した。

特別協力:池袋本町通り商店会、池袋本町中央通り商店会、としま南長崎トキワ荘協働プロジェクト協議会、南大 塚ネットワーク、一般社団法人みんなのトランバル大塚 協力: iTerrace落合南長崎、大塚記念湯、株式会社はらだ葬祭、BAR BER マエ、南大塚都電沿線協議会、 MM MART WORLD WIDE HALAL FOOD、株式会社文天不動産





Thinking about how communication is shifting during the pandemic, Ryo Sakamoto conceived a new kind of stage design that connects viewers with a performance. Temporarily setting up a stage and audience seating on a roof ordinarily inaccessible to people, an actor performed scenes from everyday life: family conversations, silly party talk, relaxing in bed. This filmed performance ended with an image of the audience sitting in the seats, intersecting the twin perspectives of viewing and being viewed. Changes in the Minami-Nagasaki neighborhood, as shot from a fixed point on the roof, were also shown on the website along with quotations from philosophy related to the theme of "scenes." Mediated through the words or perspectives of others, the familiar landscape transformed into something entirely new.

Ayami Sasaki conducted interviews about festivals with local residents in Minami-Otsuka, a district where various cultures, languages, and religions intermix. She then shot seven videos in the area based on this, adding simultaneous interpretation into Esperanto, a language devised as an international medium of communication. To watch these videos, viewers walked around the shopping streets of Minami-Otsuka to find a series of photo stand-in boards. When viewers took a photo with their faces sticking through the board, their phone would read the QR code printed on the board and open up a website for watching the respective video. From the novelty of the approach and the videos that conveyed the makeup of the Minami-Otsuka neighborhood, each and every member of the audience was encouraged to consider: What is a festival?

Tomomi Nakamura conducted questionnaires and research with locals in Ikebukuro Honcho about their past memories of festivals and the landscape From these variegated memories, she reconstructed an imaginary neighborhood as models. On the special website, short videos offered audiences a simulated experience of creating these models and six slideshows using them, and a dioramic view of everything. This presented the very process where the "scenes" within our bodies are born out of the experience of gazing at a neighborhood from a slight distance, or from gazing at the past or future.

In special cooperation with the Ikebukuro Honcho Shopping Streets Association the Ikebukuro Honcho Chuo Shopping Streets Association, Association for Cooperation Project of Toshima Minami-Nagasaki Tokiwaso, Minami-Otsuka Network, Minna no TRAMPAL Otsuka peration with iTerrace Ochiai-Minaminagasaki, Otsuka Kinen-yu, Harada Funeral Director BAR BER Mae, Minami-Otsuka Toden Line Area Association, MM Mart Worldwide Halal Food BUNTEN FUDOUSAN Co., Ltd

10 16(Fri) - 11 15(Sun) とびだせ!ガリ版印刷発信基地 ガリ版印刷発信基地、ZINEスタンド(豊島区内2箇所) ディレクション:Hand Saw Press Pop-up 印刷トラック(豊島区内各所) Pop-up ZINEスタンド(豊島区、全国各所) Pop-up Riso Zine Studio 19日間開催 来場:計3.360名 作成されたZINEの数:929点 Project Director: Hand Saw Press Biso Zine Studio, Zine Stand (two locations around Toshima). Pop-up Print Truck (various locations around Toshima), Pop-up Zine Stand (various locations around Toshima and Japan) 19 days Visitors: 3,360 Zines made: 929 誰もが参加できるZINE(手づくりの少部数冊子)の作成と交換のた The Riso Zine Studio is a print studio where anyone can make their own zine: small-circulation publications produced by individuals or groups. めの印刷スタジオ「ガリ版印刷発信基地」。D.I.Y.スタジオを運営する Following its successful appearance at the 2019 festival, the studio returned Hand Saw PressがF/T19に引き続きディレクションを担当した。 to F/T, once again overseen by Hand Saw Press, a leading figure in the DIY プログラムの拠点はサンモール大塚商店街の空き店舗を改装して printing scene in Tokyo. The project was based in a studio that temporarily took over a vacant store オープン。誰もが気軽に立ち寄れる表現と交流の場となった。製作され in a shopping street in the Otsuka area. The studio was open for anyone to たZINEは最終的に900点を超えた。

そしてF/T20のZINEづくりは活動エリアを広げ、印刷機とスタンドを 搭載した「Pop-up印刷トラック」を出張、12回にわたり豊島区内の公園、 図書館、駅前、劇場前の広場といった公共空間でワークショップを開催 した。また「Pop-up ZINEスタンド」は図書館、書店、アートスペース、カ フェなど豊島区内13ヶ所にはじまり、北は秋田から南は沖縄まで全国 14ヶ所に広がり、ZINEを通じた交流を全国に拡張することができた。

F/Tの参加アーティストを迎えての朗読・ドローイングパフォーマンス、 公園でのアートプロジェクトもZINEづくりへと繋がっていった。会期中4 回実施したライブ配信では、中継先の状況や参加者作成のZINE紹介、 ゲストを迎えてのトークなどが行われ、アーカイブ配信も実施された。

バージョンアップした交流のプラットフォームは大塚のまちから豊島区 内、全国へと大きく「とびだす」ことに成功した。

特别協力:理想科学工業株式会社

PRISO

drop by and try making a zine. By the time the studio closed at the end of the festival, over 900 zines had been made.

This year, the project also expanded by dispatching the Pop-up Print Truck with printing equipment and a stand to twelve locations around Toshima. including parks, a library, outside a station, and a plaza in front of a theatre. In these public spaces, zine workshops were held. The Pop-up Zine Stand appeared at a further thirteen locations around Toshima, including libraries, bookstores, an art gallery, and a cafe, and fourteen places around Japan from Akita in the north of the country and down to Okinawa in the south. In this way, the process of making and exchanging zines was expanded nationwide.

A reading and drawing performance event with other participating F/T artists as well as an art project in a park also built more connections to zine-making. During the festival, the Pop-up Print Truck was live-streamed on four occasions to show remote audiences what was happening at the locations, to introduce the zines that had been made, and to hold talks with guests. Archived versions of these streams were also made available on the F/T website.

Through these approaches, the exchange platform started last year evolved further and succeeded in jumping out of the local Otsuka area to reach people around Toshima and all around Japan.

In special cooperation with RISO KAGAKU CORPORATION

<出張トラックスケジュール>

10/18(日)、10/24(土)、10/25(日)、10/27(火)、10/31(土)、11/1(日)、11/2(月)、 11/3(火・祝)、11/7(土)、11/8(日)、11/10(火)、11/15(日) IKE・SUNPARK、東京芸術劇場 劇場前広場、上池袋くすのき公園、上り屋敷 公園、豊島区立巣鴨図書館、西巣鴨二丁目公園、トランパル大塚

<イベントスケジュール>

・ドローイング・パフォーマンス オル太+コ本や honkbooks 共同企画 〈Daily drawing, Daily page vol.35〉「東京史/詩」 10/24(土)東京芸術劇場 劇場前広場

・ガリ版印刷発信基地 x モモンガ・コンプレックス ZINEコラボ企画 モモンガ・コンプレックス 鑑賞ZINEをつくろう! 10/24(土)、10/25(日)東京芸術劇場 劇場前広場

 ・ライブ配信『とびだせ!ガリ版印刷発信基地からこんにちは』 10/24(土)、10/31(土)、11/7(土)、11/15(日) 東京芸術劇場 劇場前広場、上池袋くすのき公園、西巣鴨二丁目公園、 トランパル大塚

・PARK TRUCKと合同出張 11/1(日)、11/3(火・祝)、11/7(土) 上り屋敷公園、上池袋くすのき公園、西巣鴨二丁目公園

・リリクリによるアートプロジェクト 11/8(日)、11/10(火) IKE·SUNPARK

<Pop-up ZINEスタンド 設置場所 (豊島区内)>

コ本や honkbooks、ブックギャラリー ポポタム、東京芸術劇場 1階エスカレー ター横、MIA MIA、星野リゾート OMO5東京大塚、ジュンク堂書店 池袋本店 1階情報コーナー、豊島区立郷土資料館、豊島区立図書館(中央図書館、巣鴨図 書館、千早図書館、駒込図書館、上池袋図書館、目白図書館)

<Pop-up ZINEスタンド 設置場所 (全国)>

のら珈琲(秋田県)、ビルド・フルーガス(宮城県)、book cafe 火星の庭(宮城 県)、はじまりの美術館(福島県)、石引パブリック(石川県)、千年一日珈琲焙煎 所(茨城県)、PEOPLE BOOKSTORE(茨城県)、CRY IN PUBLIC(静岡県)、 hand saw press Kvoto (京都府)、汽水空港(鳥取県)、な夕書(香川県)、art space tetra(福岡県)、鹿児島県 霧島アートの森(鹿児島県)、BARRAK(沖縄県)







Pop-up Print Truck Schedule

10/18 (Sun), 10/24 (Sat), 10/25 (Sun), 10/27 (Tue), 10/31 (Sat), 11/1 (Sun), 11/2 (Mon), 11/3 (Tue), 11/7 (Sat), 11/8 (Sun), 11/10 (Tue), 11/15 (Sun) IKE-SUNPARK, Tokyo Metropolitan Theatre (plaza in front of theatre), Kami-Ikebukuro Kusunoki Park, Agariyashiki Park, Sugamo Library, Nishi-Sugamo Nichome Park, TRAM-PAL Otsuka

Event Schedule

Drawing performance with OLTA and honkbooks 10/24 (Sat) Tokyo Metropolitan Theatre (plaza in front of theatre)

Make a Momonga Complex zine! 10/24 (Sat), 10/25 (Sun) Tokyo Metropolitan Theatre (plaza in front of theatre)

Live streams 10/24 (Sat), 10/31 (Sat), 11/7 (Sat), 11/15 (Sun) Tokyo Metropolitan Theatre (plaza in front of theatre), Kami-Ikebukuro Kusunoki Park, Nishi-Sugamo Nichome Park, TRAM-PAL Otsuka

Joint pop-up with PARK TRUCK 11/1 (Sun), 11/3 (Tue), 11/7 (Sat) Agariyashiki Park, Kami-Ikebukuro Kusunoki Park, Nishi-Sugamo Nichome Park

Rerecre art project 11/8 (Sun), 11/10 (Tue) IKE · SUNPARK

Pop-up Zine Stand Locations (Toshima)

honkbooks, Book Gallery Popotame, Tokyo Metropolitan Theatre (next to the ground floor escalator), MIA MIA, Hoshino Resorts OMO5 Tokyo Otsuka, Junkudo Ikebukuro 1F Information Corner, Toshima History Museum, libraries in Toshima (Central Library, Sugamo Library, Komagome Library, Chihaya Library, Kami-Ikebukuro Library, Mejiro Library)

Pop-up Zine Stand Locations (nationwide)

Nora Coffee (Akita Prefecture), Birdo Flugas (Miyagi Prefecture), book cafe Kasei no Niwa (Miyagi Prefecture), Hajimari Art Center (Fukushima Prefecture), Ishi Biki Public (Ishikawa Prefecture), Sennenichijitsu Coffee Roastery (Ibaraki Prefecture), PEOPLE BOOKSTORE (Ibaraki Prefecture), CRY IN PUBLIC (Shizuoka Prefecture), hand saw press Kyoto (Kyoto Prefecture), Kisui Kuko (Tottori Prefecture), Natasyo (Kagawa Prefecture), art space tetra (Fukuoka Prefecture), Kirishima Open-Air Museum (Kagoshima Prefecture), BARRAK (Okinawa Prefecture)

Rendez-Vous Otsuka South & North

ファビアン・プリオヴィル・ダンス・カンパニー コンセプト・振付:ファビアン・プリオヴィル

Rendez-Vous Otsuka South & North

fabien prioville dance company Conceived and Choreographed by Fabien Prioville

ジャンルやプロ/アマの垣根を超え、幅広い年齢層が携わるコラボレー ションを実践、近年はテクノロジーとコンテンポラリーダンスを組み合わせ た作品に取り組む振付家ファビアン・プリオヴィル。『Rendez-Vous』は観 客がVRゴーグルを装着し事前に撮影されたダンス映像を撮影会場で鑑 賞するスタイルが特徴である。第10弾となるF/T公演では、日本人ダン サー4名と音楽家により構成されたチームがJR大塚駅付近の2会場で上 演に臨んだ。

南口の広場「トランパル大塚」での上演は地元住民や都電を背景に展 開。VRで流れる映像と当日の上演会場とでは気候や往来の人の数、交 通量などが異なる。そのため観客はヴァーチャル空間と現実世界のズレ に最初は戸惑いながら、まるで錯覚に陥るかのように没入していった。 毎朝この広場でラジオ体操をする地元住民が映り込むラストシーンが本 上演のハイライトとなった。

北口の上演は「星野リゾート OMO5東京大塚」のカフェで行われた。 作中ではダンサーが机を動かし飾り棚に体を入れるなどしてカフェ空間 へと溶け込んでいった。また360°カメラで撮影された映像がヴァーチャ ル映像内のダンサーと観客の関係性を親密になものにした。ダンサーが 観客を見つめ背後から手を伸ばしたりして驚かせるような場面も織り込 まれた。劇場でのダンス鑑賞ではあまり起こり得ないダンサーと観客の 一対一の関係性が本上演の特徴である。

特別協力:南大塚ネットワーク、一般社団法人みんなのトランパル大塚、星野リゾート OMO5東京大塚

0M0 星野リゾート





10.17(Sat) - 11.12(Thur) トランバル大塚、 星野リゾート OMO5東京大塚 4階 OMOベース 公演回数:290回(17日間) 来場:435名 TRAM-PAL Otsuka, Hoshino Resorts OMO5 Tokyo Otsuka 4F OMO Base Sessions: 290 (17 days) Participants: 435

Known for collaborating across a wide range of ages and for transcending disciplines and the division between amateur and professional, the choreographer Fabien Prioville's recent work has fused technology with contemporary dance.

In "Rendez-Vous," the audience wears virtual reality headsets to view video of dance filmed in advance at the same venue. For its tenth iteration at F/T, a newly formed team of four Japanese dancers and a musician created a version of the video-dance installation at two locations near JR Otsuka Station.

The performances at TRAM-PAL Otsuka in the plaza on the south side of the station took place against a backdrop of the local community and the tram line. The video that viewers experienced in virtual reality differed from the conditions at the location on the actual day in terms of the weather, passersby, and traffic. Initially bewildered by this gap between the virtual and the real, audiences then immersed themselves in the illusion. A highlight was the final scene that featured local residents doing the radio calisthenics they do every morning in the plaza.

The performances on the north side of the station took place at a cafe inside Hoshino Resorts OMO5 Tokyo Otsuka. During the work, the dancers moved desks and placed their bodies onto a display shelf, in this way melting into the space of the cafe. The video shot with a 360-degree camera meant the dancers in the virtual reality moved in close proximity to the audience. Interwoven into the experience were sometimes startling moments where the dancers would gaze directly at the audience members or come up from behind them and reach out. In this way, the work conjured up a unique one-on-one relationship between dancer and audience member impossible to achieve with watching dance in a regular theatre space.

In special cooperation with Minami-Otsuka Network, Minna no TRAMPAL Otsuka Hoshino Resorts OMO5 Tokyo Otsuka



神の末っ子アネモネ

作:松井 周、演出:キム・ジョン 原案:ヨハン・アウグスト・ストリンドベリ「夢の劇」

Divine Daughter Anemone Written by Shu Matsui, Directed by Kim Jeong Adapted from "A Dream Play" by August Strindberg

緻密な心理描写と大胆な空想力で人気を集める演出家キム・ジョン と、虚構を通し人間と社会のありようをむき出しにする劇作家・松井周。 F/T19『ファーム』で初タッグながら相性の良さを見せつけた二人が F/T20で発表した新作が、ヨハン・アウグスト・ストリンドベリ『夢の劇』 を原案とした新作『神の末っ子アネモネ』である。

自称"神の娘"「アネモネちゃん」はいつか人を救おうと思いながら人間 世界を渡り歩く。彼女は奇跡を起こそうとさまざまな行動をするが奇跡 は起きず、周囲から邪魔者扱いされてしまう。「アネモネちゃん」が巻き 起こす悲喜劇は混迷する現代を映し出し、観客の心を強く揺さぶる。

新型コロナウイルス感染拡大に伴いキャスト・スタッフの来日が叶わな かったため、今回は韓国での上演を7台のカメラで多方向から撮影し編 集した映像をオンラインで配信した。完成した映像には上演風景にくわ え客席や劇場機構なども織り込まれた。さまざまな角度から撮影された 場面や普段なかなか目にすることができない劇場の様子など、舞台芸術 の多様な面を映し出すことで、演劇の映像作品としての新たな可能性を 提示した。

協力:劇団サンプル、有限会社quinada 国際共同製作:フェスティバル/トーキョー、キョンギドシアターカンパニー

GGD GYEONGGIDO THEATRE COMPANY



11.2(Mon) - 11.15(Sun) F/T remote(オンライン会場) 再生数:408回 F/T remote (available online) Views: 408

The director Kim Jeong has built up a following for his intricate psychological portrayals and boldly imaginative stagings. The playwright Shu Matsui's fictions have laid bare humankind and society. After successfully joining forces first for "The Farm" at F/T19, the pair reunited for a fresh collaboration with this new play, freely adapted from August Strindberg's "A Dream Play."

In "Divine Daughter Anemone," the titular Anemone is a self-proclaimed daughter of a god who wanders around the human world, contemplating saving people. But her attempts to work miracles fail and she is treated like a nuisance by the people around her. The tragicomedy that she causes reflects the turmoil of the present day, and leaves a disquieting effect on the audience.

With the coronavirus pandemic making it impossible for the cast and crew to bring the production to Tokyo, a performance of the play was instead filmed in South Korea using seven cameras, edited, and then streamed online. The finished footage integrated not only the onstage performance but also the seating and mechanics of the theatre venue where it was staged. By showing a wide range of aspects of the performing arts, from scenes shot from multiple angles to the parts of a theatre that audiences do not ordinarily get to see, the production demonstrated new possibilities for filmed theatre.

In cooperation with Sample, quinada A Festival/Tokyo and Gyeonggido Theater Company co-production

わたしたちは、そろっている。

モモンガ・コンプレックス 振付・演出:白神ももこ We assemble together Momonga Complex Choreographed and Directed by Momoko Shiraga

振付・演出家の白神ももこのもと、独自の作品世界を展開するモモン ガ・コンプレックス。白神は新型コロナウイルス感染症対策で外出自粛 期間中、会えない人や行けなくなった場所へ思いを馳せるなか「個と全 体」について考えるようになった。そしてこの体験をさまざまな情景から 一人の人間を浮かび上がらせる『伊勢物語』の構造に重ね、上演という集 団で取り組む表現形態のなかでどのように個の存在を表現し連ねていく のか、という問題意識のもと本作を上演した。

本作は"観察型ミュージカル的ダンス・パフォーマンス"と銘打ち、劇 場内に設けた個室で出演者が「ゆらぎ」「うつろい」「きざし」という3つの パフォーマンスを実施、観客がそれらを観て回った。「歌物語」を意識し た上演スタイルのなか、観客は一人ひとり自由に物語を汲み取り紡いで いった。また6時間にわたる映像配信を行うとともにオンライン上で短歌 の投稿を募った。作中では出演者が採用された短歌を詠み上げ、その 歌への返歌も詠むという双方向コミュニケーションが行われた。

本作の上演を通し、離れた人同士が生み出す表現や新しい出会い、つ ながり方への希望の一端を提示することに成功した。

10.24(Sat) - 10.25(Sun) 東京芸術劇場シアターイースト、 F/T remote(オンライン会場) 公演回数:上演6回/配信2回 来場:161名/視聴者数:182名 Tokyo Metropolitan Theatre (Theatre East), F/T remote (available online) Performances: 6 / Streams: 2 Audience: 161 / Viewers: 182

Led by choreographer and director Momoko Shiraga, Momonga Complex's work presents a unique world through dance. During the period when the government asked people in Japan to refrain from going out in order to reduce the risk of catching or spreading the coronavirus, and as we inevitably thought of those we could not meet or the places we could not go, Shiraga found herself reflecting on the relationship between the individual and the whole. The work that resulted from this took that experience and applied it to the structure of "The Tales of Ise," a collection of poems from the Heian period comprising a portrait of a single human life through various scenes, and also attempted to explore the potential for performance, which is a form of expression conducted collectively, to express the existence of the individual.

Described by its creator as an "observational musical-style dance performance," the work featured rooms arranged inside the theatre. Inside these rooms, the dancers carried out three performances ("Fluctuations," "Vicissitudes," and "Signs"), which the audience viewed while moving around the venue. Performed in the style of *uta monogatari*, a type of Japanese narrative told as a series of poems, each member of the audience was free to dip into the story and weave their own tale. The performance was made available as a six-hour live video stream, while people were also able to submit *tanka* poems in advance. The performance took on an interactive dimension when the dancers read out selected poems, and then poems written in response

Facilitating new encounters and forms of expression created by people in separate locations, "We assemble together" offered hope for ways to connect with one another



ムーンライト 構成•演出:村川拓也

Moonlight Conceived and Directed by Takuya Murakawa

F/T12『言葉』以来8年ぶりの参加となる村川拓也が2018年に京都市 西文化会館ウエスティで初演した『ムーンライト』を2年ぶりにF/T20で再 演した。

本作は村川と京都に暮らす70代の男性との対話で進行していく。村 川の質問に導かれ男性は音楽との出合いや20歳で発症した目の病との つきあい方について述べる。対話の合間にさまざまな世代の演奏者がピ アノ曲を披露し男性の記憶を彩る。最後に男性は、自身がピアノを始め たきっかけであるベートーベンのソナタ「月光」を弾こうとするが……。

台本なしで実在の人物の語りを演技と交錯させる本作は、私たちをと りまく現実とはなにか、劇場で目にしている非現実とはなにか、観客に 思考を促す「ドキュメンタリー・ドラマ」である。コロナ禍で慌ただしい 日々のなか、本作に漂うゆっくりとした時間の流れに息をつくことができ た観客も多かったことと思う。

また、本公演に合わせKANKARA Inc.が村川の15年の創作の歴史を たどるドキュメントブックを刊行、F/Tは協力という形で携わった。ドキュ メントブックはこれまでのF/T上演作品をはじめ、関東圏ではあまり上演 機会の多くなかった村川作品について紹介している。

製作:ロームシアター京都(初演 2018年12月 京都市西文化会館ウエスティ)



『Pamilya』をめぐるトーク 登壇者:村川拓也、長津結一郎、長島 確 Pamilya Talk Speakers: Takuya Murakawa, Yuichiro Nagatsu, Kaku Nagashima

F/T20『ムーンライト』の上演に先駆け、演出の村川拓也が近作『Pamilya』についてのトーク配信 をドラマトゥルクの長津結一郎、F/Tディレクターの長島確とともに行った。

福岡の高齢者福祉施設で働くフィリピンの外国人介護福祉士候補生が、自らの日常を舞台上で 再現し演じる『Pamilya』では、「介護する/される」人間関係や家族の結びつきが描かれる(タイト ルの「パミリヤ」とはタガログ語で「家族」の意)。当初F/T20では『ムーンライト』『Pamilya』の2作上 演を企画していたが、新型コロナウイルス感染拡大により『Pamilya』の上演が難しくなった経緯があ る。80分に及ぶ鼎談では実際の舞台映像を交えた製作秘話や、村川が作品に込めた想いが明かさ れた。本配信を通して村川作品を広く紹介し、観客の作品理解を深める場を作ることができた。

Ahead of the production of "Moonlight" at F/T20, a talk about director Takuya Murakawa's recent work "Pamilya" was streamed, featuring Murakawa in conversation with the dramaturge Yuichiro Nagatsu and the F/T director. Kaku Nagashima

In "Pamilya," a trainee non-Japanese care worker at a care home for the elderly in Fukuoka re-enacts her everyday life onstage. With a title meaning "family" in Tagalog, the piece portrays the relationship between the carer and cared for, and the bonds of family. F/T originally intended to present both "Moonlight" and "Pamilya" in its 2020 program but plans for the latter production were canceled due to the coronavirus pandemic. Over their eighty-minute discussion, which also included video highlights from the performance, the speakers shared the ideas behind "Pamilya" and anecdotes about how it was created. In this way, the streamed talk helped Murakawa's work reach a wider audience and increased understanding of his work.

Photo:三浦麻旅

10.31 (Sat) - 11.1 (Sun)
東京芸術劇場シアターイースト
公演回数:2回 来場:302名
Tokyo Metropolitan Theatre (Theatre East)
Performances: 2 Audience: 302

Marking his first appearance at F/T since "words" in 2012, Takuya Murakawa returned to the festival with a revival of "Moonlight," which premiered at Kyoto City Nishi Culture Hall in 2018.

This performance unfolds as a conversation between Murakawa and a man in his seventies who lives in Kyoto. Prompted by Murakawa's questions, the man describes his encounter with music and how he has lived with a visual impairment that began when he was twenty years old. In between these conversations, performers of different ages play piano music to adorn the man's memories. It culminates with the man's own recital of Beethoven's "Moonlight Sonata," which first inspired him to learn the piano.

Intermixing an unscripted account by an actual person with performances. this is a piece of documentary theatre that encourages us to consider the nature of reality that surrounds us, and the unreality that is in front of us in a theatre. Amid the frantic haste ushered in by the coronavirus pandemic, many members of the audience surely also appreciated the leisurely, measured pace that flowed throughout the performance.

To accompany the revival, a book looking back over Murakawa's fifteen-year career was published by KANKARA Inc. in partnership with F/T. The book showcased Murakawa's previous performances, including the productions he has presented at F/T in the past, and making it a useful resource for audiences in the Kanto region, where Murakawa's work is less frequently staged.

A ROHM Theatre Kvoto production (premiere: December 2018, Kvoto City Nishi Culture Hall)



Photo:石川 約

10.25(Sun) - 11.15(Sun) F/T remote(オンライン会場) 再生数:225回 F/T remote (available online) Views: 225



(公財)福岡市文化芸術振興財団,西部ガス興商(株). 福岡舞台芸術施設運営共同事業体、(一社)九州地域舞台芸術振興会、 なみきスクエアみらいネットワーク、福岡市

Fukuoka City Foundation for Arts and Cultural Promotion, Saibu Gas Urban Development Co., Ltd., Fukuoka Performing Arts Facility Management Joint Enterprise, Kyushu Regional Performing Arts Promotion Association Namiki Square Mirai Network, Fukuoka City

トランスフィールド from アジア

Transfield from Asia

F/Tは2014年以降、アジア地域から毎年1カ国を特集する「アジアシリーズ」 に取り組んできた。F/T18では国別特集の枠組みを外し、国境や分野の壁 を超え広く「アジアの今」を紹介した。F/T19からは「トランスフィールド from アジア」と改称し、観客と共にこれからのアジアの文化を築く原動力 となる場を目指した。今年も同じテーマを継続・深化することが必要不可 欠であると考え、F/T20では、さらなる横断的領域の拡大と持続可能性を 高めることを試みた。

助成:国際交流基金アジアセンター アジア・文化創造協働助成



In 2014, F/T launched the Asia Series to showcase a nation in the Asian region each festival. From 2018, the program was relaunched with a "transfield" focus to introduce contemporary aspects of Asia in ways that transcend boundaries separating nations and disciplines. Renamed Transfield from Asia from F/T19, the program aspired to form a platform for cultivating future culture in Asia together with audiences. Believing it essential to continue and deepen that approach, F/T20 endeavored to enhance the program's sustainability and interdisciplinary range.

Grant: The Japan Foundation Asia Center Grant Program for the Promotion of Cultural Collaboration トランスフィールド from アジア ベラック Berak テアター・エカマトラ Transfield from Asia Berak Teater Ekamatra

多民族国家シンガポールの現実に向き合う創作を30年以上続けてき た劇団「テアター・エカマトラ」。新型コロナウイルス感染症拡大により 2020年3月の本国公演が中止となった『Berak』を新たに映像作品として 製作、4言語字幕付きによるオンライン配信を実現した。

本作は自死や病などさまざまな「死」に直面する家族を描いた原作戯 曲をもとに、宗教設定を仏教からイスラム教に置換えて再構築した点が 特徴といえる。実際の上演風景に加え、影絵やサイレント映画、アニメー ションなど、重いテーマ内容と工夫を凝らした映像が合わさった、まさに 「映像演劇」となった。

「テアター・エカマトラ」は製作の軸として掲げる「トランスクリエーショ ン--言語の翻訳にとどまらず、文化的な背景・環境全体を再創作するこ と一」の手法で、少数コミュニティの視点から戯曲の再構築を行い、社 会的問題を一層普遍的なものへと昇華しているのだ。

多言語字幕を付したオンライン配信により、当初の予想を上回る海外 からの視聴者に恵まれ再配信が行われた。F/Tが海外作品を世界に届 ける橋渡しを担ったことで、今後の展開を示唆する大きな一歩となった。



テアター・エカマトラ ショート・ドキュメンタリー Teater Ekamatra Documentary

テアター・エカマトラが『Berak』製作の軌跡を振り返る動画を無料公開した。製作 チームは本国公演初日3日前の中止判断が困難であったこと、当初記録映像のみを 構想していたもののなぜ「映像演劇」を製作しようと考えたのかなど、赤裸々な思いや 製作経緯を語った。彼らの判断や創作精神に2020年に生きる誰もが共感できる20分 間であった。

Teater Ekamatra produced a short documentary looking back on the production of "Berak," which was then made available for free viewing online with English subtitles. In the twenty-minute video, the creative team explained about the difficult decision to cancel the original performance in Singapore three days before the premiere, and why they made a "theatre-film" instead of the more straightforward filmed recording of the performance they had initially planned. These candid interviews offered insights on the production and creative process that were affirming and recognizable for viewers watching in 2020.

助成:ナショナル・アーツカウンシル シンガポール 国際交流基金アジアセンター アジア・文化創造協働助成

Supported by National Arts Council, Singapor Grant: The Japan Foundation Asia Center Grant Program for the Promotion of Cultural Collaboration

10.16(Fri) - 10.29(Thur), 11.7(Sat) - 11.15(Sun) F/T remote(オンライン会場) 再生数: 429回 F/T remote (available online) Views: 429

Teater Ekamatra is a theatre company whose work has engaged with the multiethnic reality of Singapore for over thirty years. At Festival/Tokyo, it presented a new film version of "Berak" with subtitles in four languages. The staged performance of "Berak" in Singapore was canceled in March due to the coronavirus pandemic.

Based on a play about a family dealing with death, be it suicide or from illness, this adaptation shifted the religious setting from Buddhist to Muslim. Featuring shadow puppetry, silent film technique, and animation in addition to the actual onstage performance, the result was something that explored heavy themes while retaining the theatrical elements of the original stage production and also incorporating approaches unique to filming.

The company's signature "transcreation" method, which not only translates the language of the source material but also transposes its cultural background and overall environment, reconstructed the script from the perspective of a small community, and elevated the social dilemmas depicted into something more universal.

Because the production streamed with subtitles in multiple languages demand was higher than expected from international viewers and the streaming period was extended. By allowing the festival to function as a platform for sharing an overseas work globally, the production constituted a major step forward with implications for how the festival could develop in the future

> 10.21(Wed) -F/T remote(オンライン会場) 再生回数:227回 F/T remote (available online) Views: 227





トランスフィールド from アジア F/T × BIPAM 交流プロジェクト ディバイデッド・センシズ ザ・シティ・アンド・ザ・シティ The City & The City: Divided Senses パートナー:BIPAM(バンコク国際舞台芸術ミーティング) Transfield from Asia F/T + BIPAM Exchange Project

The City & The City: Divided Senses Partner: Bangkok International Performing Arts Meeting

本企画は東南アジアにおける舞台芸術のプラットフォームとして年々 存在感を増すバンコク国際舞台芸術ミーティング(BIPAM)とF/Tとの 交流企画である。コロナ禍でも新たに出会い刺激を受け合うことを目的 に、バンコクと東京からそれぞれ3人のアーティストがチームを組み、各々 が生活する都市についてリサーチをしたうえで、そのプロセスのオンライ ン上での交換を2020年8月~10月にかけて行った。そして3か月間の互い のリサーチの交換の過程をまとめた映像作品を制作した(「プロセスの 圧縮」としてF/T remoteにて公開)。またリサーチや交換から生まれた 作品を展示するプレゼンテーションを各都市で実施した。東京会場で は「少し先の未来から、現在の東京を紹介する郷土資料館」をコンセプ トに展示を構成。東京の24時間を30分のタイムラインに圧縮し何度も繰 り返すことで、2020年の都市の時間の流れを表現した。また、コロナ禍 では実際に訪れることが難しい東京とバンコク、それぞれの会場での展 示を紹介しあうヴァーチャルツアーを行った(「Divided Tour Tokyo」/ 「Divided Tour Bangkok」としてF/T remoteにて公開)。

助成:国際交流基金アジアセンター アジア・文化創造協働助成

○ディレクター/メンター

長島 確(F/T)、 ササピン・シリワーニット(BIPAM、ニックネーム:プーペ) ○参加メンバー

パカモン・ヘーマジャン(ニックネーム:マッシュ)、チャナポン・コムカム (ニックネーム:タイム)、櫻内憧海、曽根千智、チャットチャワン・スワン サワッディ、渡邊織音、ピヤワン・サップサムルアム(ニックネーム:ニン)

プレゼンテーション 東京 10.30(Fri) - 11.1(Sun) 東京芸術劇場 シアターウエスト 公演回数:3回 来場:195名 Tokyo Metropolitan Theatre (Theatre West) Days: 3 Visitors: 195

This is an exchange project with Bangkok International Performing Arts Meeting, which has established itself as an increasingly important platform for the performing arts in Southeast Asia. Aiming for new encounters and stimulations even as the coronavirus pandemic continues to rage, two newly formed teams of three artists from, respectively, Tokyo and Bangkok undertook research into their own cities. This process was then shared online between August and October 2020. A video, "Process Compilation," was made documenting that three-month research exchange process and was made available as part of the F/T remote online program. The works that emerged from the research and exchange were then organized into exhibitions held separately in the two cities. For the Tokyo event, the exhibits were arranged as if the venue was a local history museum introducing present-day Tokyo from the near future. Twenty-four hours in Tokyo was condensed into a thirty-minute timeline that played out over and over again across the whole venue in various ways, expressing the flow of time in the city in 2020. Since the pandemic made it difficult for people to travel and visit both venues, virtual tours were also produced to showcase the exhibits in Tokyo and Bangkok, which were then put online as part of F/T remote ("Divided Tour Tokyo" and "Divided Tour Bangkok").

Grant: The Japan Foundation Asia Center Grant Program for the Promotion of Cultural Collaboration

ODirectors & Mentors

Kaku Nagashima (F/T), Sasapin (Pupe) Siriwanij (BIPAM)

OParticipants

Pakhamon (Much) Hemachandra, Chanapon (Time) Komkham, Shoumi Sakurauchi, Chisato Sone, Chatchavan Suwansawat, Shikine Watanabe, Piyawan (Ning) Sapsamroum





トランスフィールド from アジア ヴォイシス・イン・ザ・タイム オブ・パンデミック Voices in the Time of Pandemic Transfield from Asia Voices in the Time of Pandemic

新型コロナウイルスの世界的流行が収束しないなか、アジア各国の アーティストたちの現在の声を聞くべく、F/Tはこれまで開催してきた「ア ジアシリーズ」および「トランスフィールド from アジア」参加アーティスト たちにビデオメッセージを送ってもらうよう呼びかけた。本プロジェクトは その内の10組の応答をウェブサイト上で公開したものである。

アーティストたちには「最近行ったパフォーマンスについて」「街の様 子、人々の振る舞いに起こっている変化」「新しい生活様式が自身の関心 や作品に及ぼした影響」という三つの問いを投げかけた。彼らはコメン ト、演奏やパフォーマンスなどさまざまな方法で回答を寄せた。

各アーティストが送ってきた映像からはアジア各地のコロナ禍の状況 が伝わってくる。本企画を通し2020年という特異な年におけるアジアの アーティストの「感情や思考のアーカイブ」を作成することができた。ま た過去の参加アーティストたちが本プロジェクトにかかわることで、F/T とアジア圏が新たな関係性を構築することに成功した。

助成:国際交流基金アジアセンター アジア・文化創造協働助成

○参加メンバー

ピチェ・クランチェン、ソ・ヒョンソク、居間 theater、リーダイグオ、オク イ・ララ×滝朝子、ノーウェア、ジャヒド・リポン、ウォン・オイミン、スン・ シャオシン、イ・キョンソン

















Photo:富田了³

11.11 (Wed) -F/T remote(オンライン会場) 再生数:626回 F/T remote (available online) Views: 626

As the coronavirus pandemic continued worldwide, F/T asked previous participating artists from the Transfield from Asia series and its predecessor, the Asia Series, to make video messages that could allow audiences to hear the voices of artists in Asia today. Ten video messages were published on the festival website.

Each artist was given three topics or questions: recent performances; the changes in their cities or in the behavior of people; and the impact of the new normal on their interests and work. The artists responded to these in various ways, from giving comments to playing music and performing.

The footage that the artists contributed conveyed a strong sense of the circumstances of life across Asia during the pandemic. The videos cumulatively formed an archive of the feelings and thoughts of Asian artists during the strikingly unusual year that was 2020. By involving artists who had previously participated in the festival, the project succeeded in building new relationships between F/T and Asia.

Grant: The Japan Foundation Asia Center Grant Program for the Promotion of Cultural Collaboration

OParticipants

Pichet Klunchun, Seo Hyun-suk, ima theater, Li Daiguo, Okui Lala + Asako Taki, Nowhere Art Studio, Zahid Repon, Oi Min Wong, Sun Xiaoxing, Lee Kyung-sung

F/T remote 概況

F/T remote

F/T20では新型コロナウイルス感染拡大を受け、新しいフェスティバルのかた ちを実験する場として公式HP上にオンライン会場「F/T remote」を開設した。 無料エリアと有料エリア、二つのエリアを展開し、現在までに12プログラムを公 開。従来のF/Tには来場が叶わなかった地方や海外など遠方の観客にもアプ ローチが可能となった。無料エリアではアーティストやディレクターによるトーク 番組や映像作品、有料エリアでは映像演劇などの主催プログラムやシンポジウ ムが配信され、距離を超えたコラボレーションが数多く実現した。ただ作品を配 信するだけでなく柔軟性のある幅広いプログラムを多数企画した「F/T remote」 は、F/T20の強みとして機能することとなった。

In an attempt to explore new approaches for festivals and find a way to hold events safely during the coronavirus pandemic, F/T20 launched a new online venue, F/T remote, on the main festival website. It has so far hosted twelve pieces of content, both free and paid. This approach also made it possible to experience the festival for audiences who ordinarily cannot visit in person because they live in parts of Japan far from Tokyo or outside Japan. The free content included talks with artists and the festival directors as well as videos, while the paid content featured filmed performances from the main festival program and a symposium. In this way, F/T remote could collaborate with many people regardless of their respective locations. Not simply an online platform for streaming performances, F/T remote's wide range of flexible programming was one of the strengths of the 2020 festival.



セットデザイン:オンデルデリンデ

<有料プログラム Paid Content>



トランスフィールドfromアジア ^{ペラック} Berak Berak 10/16(Fri) - 10/29(Thur), 11/7(Sat) - 11/15(Sun) 再生数:429回 Views: 429



わたしたちは、そろっている。 We assemble together 10/24(Sat) - 10/25(Sun) 視聴者数:182回 Views: 182



F/T20シンボジウム フェスティバル・アップデート なぜ舞台芸術祭をまちなかで? (そしていかにしてこの感染症の時代にさえも開催するのか) Symposium: Festival Update Why hold a performing arts festival "in the city"? (And how to hold it even in a time of pandemic?) **10/21(Wed) – 7:00 p.m. – 9:30 p.m., 10/22(Thur) – 11/15(Sun)**

再生数:104回 Views:104



神の末っ子アネモネ Divine Daughter Anemone 11/2(Mon) - 11/15(Sun) 再生数:408回 Views: 408

<無料プログラム Free Content>



「フェスティバルとデザイン 関係のかたち」 Directors' Lounge Festivals and Design: Forms of Relationships 8/27(Thur) -再生数:359回 Views: 359



移動祝祭商店街 まぼろし編 特設ウェブサイト Roaming Shopping Street Festival: Phantom Edition (special website) 10/16(Fri) – リーチ数:19,688 Reach: 19,688



テアター・エカマトラ ショート・ドキュメンタリー Teater Ekamatra Documentary 10/21(Wed) - 10/25(Sun) 再生数:227回 Views: 227



11/11(Wed) -再生数:626回 Views: 626



『とびだせ!ガリ版印刷発信基地』開催直前!オンライントーク Pop-up Riso Zine Studio Pre-Opening Offline Talk 10/12(Mon) – 再生数:296回 Views: 296



オープニング・トーク Opening Talk 10/16(Fri) -再生数:183回 Views: 183



村川拓也『Pamilya』をめぐるトーク Pamilya Talk 10/25(Sun) - 11/15(Sun) 再生数:225回 Views: 225



トランスフィールド from アジア F/T × BIPAM 交流プロジェクト ザ・シティ・アンド・ザ・シティ ディバイデッド・センシズ **The City & The City: Divided Senses** Transfield from Asia F/T + BIPAM Exchange Project The City & The City: Divided Senses

11/13(Fri) -再生数(合計):112回 Views: 112 F/Tでは上演・鑑賞型プログラムだけではなく、研究開発・教育普及プログ ラムを実施。F/T20の本プログラムは新型コロナウイルス感染症対策に配 慮しながら、舞台芸術分野におけるアーティストのチャレンジ・ステップ アップの支援や、次世代を担うつくり手・観客の育成を目指した。研究開 発プログラムでは、オンラインで3カ国の芸術監督と対談する「シンポジウ ム」やアーティストの相互批評による鍛錬の場「アーティスト・ピット」を 実施。教育普及プログラムでは、アーティストや参加者同士の対話を通じ て思考を深める学生向けワークショップ「ダイアローグ・ネクスト」、イン ターンシップ・プログラム、サポーター・プログラムを行い、世代や立場を 超えた多様な人々の交流や学びの場が生まれた。

In addition to its program of performances and public events, F/T also runs programs related to research and education and outreach. Implemented this year with due consideration for the ongoing coronavirus pandemic, these programs aimed to support performing arts practitioners in developing their work further, and to cultivate the next generation of artists and audiences. The Research Program featured an online symposium with artistic directors from four countries as well as the Artist Pit training initiative, where artists give each other feedback. The Education & Outreach Program included the Dialogue Next workshops, where students engage in dialogue with artists and the other participants, as well as internship and volunteer programs, all offering opportunities for learning and interaction with a wide range of people across different ages and positions in society.

研究開発プログラム F/T20シンポジウム フェスティバル・アップデート なぜ舞台芸術祭をまちなかで? (そしていかにしてこの感染症の時代にさえも開催するのか) Symposium: Festival Update Why hold a performing arts festival "in the city"?

世界都市である東京でこれからどのような舞台芸術祭が行われるべ きなのか。各国のフェスティバルディレクターと意見を交換し、今後の展 望を共有するシンポジウム「フェスティバル・アップデート」。

(And how to hold it even in a time of pandemic?)

今回は「まちなか」に集まる人びとと「ともにつくる」取り組みを行うシ ンガポール、チュニジア、マンチェスター、東京の4都市を中継で繋いだ。 シンガポール国際芸術祭次期ディレクターのナタリー・ヘンディッジは、 都市が持つ複雑性を尊重しながら、アーティストや場をゆるやかにつな げていく方法に言及した。またチュニジアのドリーム・シティ芸術監督の ソフィヤーン・ウィーシーは、首都チュニスが直面している複雑な現実を 受け入れいかにフェスティバルを発展させていったかを紹介。さらにマン チェスター国際フェスティバル(MIF)芸術監督のジョン・E・マグラーは、 デジタルツールを通して観客が獲得する身体性やフェスティバルの新た な形式について語った。

日本語・英語・仏語の3か国語の通訳を介した意見交換を通し、フェス ティバルに集う人々がオンラインで新たに出会い、つながることができる 機会となった。また、会期終了までアーカイブ配信が行われた。

○登壇者

ナタリー・ヘンディッジ(シンガポール国際芸術祭次期ディレクター) ソフィヤーン・ウィーシー(ドリーム・シティ[チュニス]芸術監督) ジョン•E•マグラー

(マンチェスター国際フェスティバル[MIF]芸術監督、最高責任者) 長島確(フェスティバル/トーキョー ディレクター) 河合千佳(フェスティバル/トーキョー 共同ディレクター)



10.21(Wed) - 11.15(Sun) 旧真和中学校、F/T remote(オンライン配信) 再牛数:104回 Former Shinwa Junior High School, F/T remote (available online) Views: 104

Exploring the kinds of performing arts that should be fostered in the global city that is Tokyo, the "Festival Update" symposium series is a forum for exchanging and sharing ideas and perspectives with festival directors from around the world

This year featured festivals from four cities (Singapore, Tunis, Manchester, and Tokyo) engaged in bringing people together "in the city" in a broader sense, and in creating things with those people.

Natalie Hennedige, the director designate for Singapore International Festival of Arts, touched on ways for artists and places to form loose links while respecting the complexity of a city. Sofiane Ouissi, the artistic director of Dream City, introduced the complicated realities faced by Tunis, and how his festival has developed. John E. McGrath, who serves as artistic director of Manchester International Festival, described the new formats of the festival and the physicality acquired by audiences through digital tools.

Exchanging insights in three languages (Japanese, English, and French), the symposium proved an opportunity for the people who gather at festivals to meet and connect online. After the event was streamed live, an archived version of the video was made available until the end of F/T20

OSpeakers

Natalie Hennedige

(Director Designate, Singapore International Festival of Arts) Sofiane Ouissi (Artistic Director, Dream City) John E. McGrath (Artistic Director and Chief Executive, Manchester International Festival) Kaku Nagashima (Director, Festival/Tokyo) Chika Kawai (Co-Director, Festival/Tokyo)

研究開発プログラム ディレクターズ・ラウンジ Research

Directors' Lounge

ディレクターと共同ディレクターがホストとなり、いま会いたい、話した い方をゲストに迎え、活動のプロセスや背景、思考に迫るトークシリーズ。

今年は空想地図作家、若手演出家、アートディレクターを招き、まちと 劇場やアートプロジェクトとの関係のあり方、フェスティバルやアートディ レクションの制作過程における「ディレクター/演出家」の役割や共同製 作のあり方について意見を交わした。サイトスペシフィックな作品を制作 する中でのまちの特性の読み取り方や地域の人々との関わり方、フェス ティバルを象徴するイメージの探り方や独断的でない決定プロセスなど、 協力関係に基づく創作と意思決定を実現するための方法についてヒント が得られた。

また、本トークシリーズは対話形式で展開し、作品を観ただけでは触 れられない創作に対する想いや興味、関心を掘り下げることで、ゲスト自 身の魅力に触れる有意義な機会となっている。

(12.5(Wed) (23.18(Wed) (38.27(Thur) 旧真和中学校、F/T remote(オンライン会場) 来場·再生数※①来場:15名 ②133回 ③359回 Former Shinwa Junior High School, F/T remote (available online) ① Attendees %: 15 ② Views: 133 ③ Views: 359

In this series of talks, the directors of Festival/Tokyo are the hosts who invite guests to share their work processes, backgrounds, and ideas.

This year's guests were a creator of imaginary maps, a young theatre director and an art director. In the informal discussions, they exchanged opinions with the directors about the relationship between the city and theatre venues or art projects, about the role of directors in the creative process for art direction or a festival, and about co-productions. The conversations provided various insights on ways to achieve decision-making and creativity that are based on collaboration, not least how to interpret the special characteristics of a place and how to interact with local people while making a site-specific work, how to search for symbolic images of a festival, and decision processes that are not dogmatic.

Unfolding in a dialogue format, and digging up interests, concerns, and thoughts on creativity that audiences cannot encounter just by watching a performance, the talks were a meaningful opportunity to learn about the guests and their remarkable work.

(1) 2020.2.5 (Wed) ゲスト: 今和泉隆行

第1回のゲストは、7歳の頃から空想地図(実在しない都市の地図)を描く空想地図作家 の今和泉降行。空想都市「中村市」「西京市」の劇場やフェスティバルを一緒に想像して みることで、文化的活動と都市の関係性を探った。

Guest: Takayuki Imaizumi

The first guest in the talk series was Takayuki Imaizumi, who has created imaginary maps of nonexistent cities since the age of seven. By envisioning together the festivals and theatres in the fictional cities of Nagomuru and Saikvo, the talk explored the relationship between cultural activities and the city.



2020.3.18 (Wed) ゲスト:阿部健一

第2回のゲストは、場の特性を読み取り、その土地の人々と関わりながら演劇をおこなう 演劇活性化団体uniの阿部健一。プロジェクトの紹介を通して、なぜ劇場ではなくまちに 出るのか、まちとどんな風に、どんな関係を作っているのかを尋ねていった。

Guest: Kenichi Abe

The second session welcomed Kenichi Abe of the "theatre activation group" uni, which decodes the characteristics of a place and then makes theatre through a process of interaction with local people. Drawing on examples of previous projects, Abe described why he leaves conventional theatre spaces and goes out into the city, and the ways he builds relationships with the city and what kinds



2020年3月18日 F/T19ディレクターズ・ラウンジ ゲスト:阿部健一さん

③ 2020.8.27 (Thur) ゲスト:高田 唯

第3回のゲストは、F/T19からF/Tのアートディレクションを手掛けるAllright Graphics の高田 唯。

ロゴとメインビジュアル刷新の背景、演劇とアートディレクションにおけるそれぞれのイ メージ作りや協働作業の方法について語り合った。

Guest: Yui Takada

The guest speaker for the third talk was Yui Takada of Allright Graphics, who has handled the art direction for F/T since the 2019 festival. He spoke about the F/T logo and key visual relaunches as well as collaborative working styles and image-building in theatre and art direction.

※F/T20 動員数には2020年8月27日実施分のみ計上



研究開発プログラム F/T20 アーティスト・ピット ファシリテーター:西尾佳織 ゲスト講師:國分功一郎、アサダワタル Research Artist Pit

Facilitator: Kaori Nishio / Guest Instructors: Koichiro Kokubun, Wataru Asada

「アーティスト・ピット」は相互批評を通して作品や創作プロセスの質 を高めていくアーティスト向けの研究開発プログラムである。給油や修理 を担う自動車レースのピットインのように、アーティストが創作活動を見直 し態勢を整えるための場を目指し実施している。

2年目の開催となったF/T20では、「次の10年を考える -いかにひらき、 いかに閉じるか?」をテーマに、劇作家・演出家の西尾佳織がファシリ テーターを務めた。参加者6名は20代から40代の演出家や俳優が公募に よって選ばれた。新型コロナウイルス感染症対策として全日程をオンライ ンで実施したため、地方や海外にまで参加の間口を広げることができた。 前半では各自の創作上の問題を共有しながら議論を重ねた。集団創 作で突き当たる問題により深く向き合うため、プログラムの中盤と終盤に はゲスト講師を迎えた。哲学者の國分功一郎からは創作活動の中で直 面する権力の問題についてハンナ・アーレントの論考を基に学び、文化 活動家でありアーティストでもあるアサダワタルからはアートプロジェクト の実例と課題、アーティストとしてではなく異なった立場から創作に携わ る意義について学んだ。

6日間にわたるディスカッションを通して、参加者はこれまでの経験や 現在の取組についてより具体的な言葉で定義し直した。演劇における 「プロフェッショナル」とは何か、創作活動だけではない多様なアーティス トのキャリア展望を探求する場となった。

○参加者 伊藤拓也、大河原準介、近藤瑞季、酒井一途、 大道寺梨乃、萩原雄太



11.30(Mon) - 12.14(Mon)
オンライン
実施回数:全6回 参加者:6名
Online
Sessions: 6 Participants: 6

Part of the Research Program, Artist Pit is a training initiative for artists that aims to help enhance their work and creative processes through mutual feedback. Like a pit stop where race cars are refueled and receive repairs, artists here finetune their approaches and revise their practices

For its second year, Artist Pit explored the theme of how far participants will open up in the next ten years. Playwright and director Kaori Nishio served as the facilitator. The six participants were selected from an open call and included directors and actors aged from their twenties to forties. Due to the coronavirus pandemic, the entire program was held online, though this also made it accessible to those based outside Tokyo and even Japan.

In the first half, participants shared and discussed the problems they experience in their practices. In the middle and final part of the program, two guest instructors helped participants probe deeper into the issues that arise in collective creativity. Through a discussion of Hannah Arendt, philosopher Koichiro Kokubun introduced the problems of power that we face in creative activities. Cultural activist and artist Wataru Asada presented art project case studies and challenges, and the significance of involvement in creative practices from a position different from that of an artist. Across the six-day discussions, the participants were able to redefine in more concrete terms their past experiences and current engagements. The program became an opportunity for them to explore what a "professional" is in theatre, and various career prospects not restricted to creative activities.

()Participants Takuya Ito, Junsuke Okawara, Mizuki Kondo, Itto Sakai Rino Daidoji, Yuta Hagiwara

教育普及プログラム ダイアローグ・ネクスト 全体監修:中尾根美沙子 Education & Outreach Dialogue Next Program Supervisor: Misako Nakaone

今年で3年目を迎える学生向け対話プログラム。演目の鑑賞、アーティ ストとの対話、参加者同士のディスカッションやワークショップを通した 多様な価値観との出合いを目的としている。総合監修は昨年に引き続 き、青山学院大学ワークショップデザイナー育成プログラムのプロデュー サーを務める中尾根美沙子を迎えた。芸術分野のみならず様々な分野 を専攻する12名の学生が集い、それぞれの共通項や差異を手がかりに 対話を深めていった。

本年度のプログラムは全7回のうち2回がオンラインで実施され、その 他のワークショップ・鑑賞対話等は感染症対策をとりながら対面で行わ れた。それぞれの発言に注目が集まりやすいオンラインと、場の雰囲気 を共有しながら進めるリアルな対話が相互に作用し、回を追うごとにコ ミュニケーションが豊かになっていった。

まとめの会では参加者が三つのグループに分かれ、「対話について」や 「見る・見られるについて」などのテーマで発表を行った。その後、これま でのダイアローグ・ネクストを振り返り、言葉ではなく粘土造形で感情・ 感想を表現する時間がとられた。各参加者同士がそれぞれの持つ多様 でユニークな内面を共有する時間となった。 10.10(Sat) - 11.8(Sun) フェスティバル/トーキョー会場内各所、オンラインほか 実施回数:全7回 参加者:12名 Various Festival/Tokyo venues, online, etc. Sessions: 7 Participants: 12

Dialogue Next reached its third year with the 2020 festival. It aims to generate diverse values and encounters through watching performances, talking with artists, discussions among participants, and workshops. As with last year, the program supervisor was Misako Nakaone, who produces a workshop designer training program at Aoyama Gakuin University. The participants were twelve students majoring not only in arts subjects but also in various other disciplines, and who drew on the things they did and did not have in common to advance their dialogue together.

The workshop took place over seven sessions, two of which were held online, and also included workshops and watching performances, which were all conducted with due care for social distancing. The online sessions, where it was easier to focus on individual remarks, and the in-person discussions, where participants experienced the shared mood in the location, worked reciprocally, helping communication grow richer with each session.

In the wrap-up session, the participants split into three groups, and gave presentations on such themes as dialogue and seeing versus being seen. They followed this with a look back over the Dialogue Next sessions to date, and then spent time expressing their feelings and impressions not through words, but with clay. In this way, the participants could share their varied, unique mindsets with one another.

開催スケジュール

第1回 10月10日(土) 13:00-15:30 ※オンライン実施 キックオフミーティング F/Tディレクターとの対話 ゲスト:長島 確

第2回 10月11日(日) 13:30-17:30 演劇ワークショップ 講師:三浦直之(ロロ主宰)

第3回 10月25日(日) 11:30-15:00 モモンガ・コンプレックス 『わたしたちは、そろっている。』 ストリーミング配信視聴 感想共有会

第4回 10月29日(木) 16:30-19:00 モモンガ・コンプレックス 白神ももことの対話 ゲスト:白神ももこ 第5回 11月1日(日) 15:00-18:30 村川拓也『ムーンライト』観劇 村川拓也との対話 ゲスト:村川拓也

第6回 11月3日 (火・祝) 13:00-17:30 ※オンライン実施
 『Berak』鑑賞(※事前に視聴)
 対話ブログラムを予定
 ゲスト:モハマド・ファレド・ジャイナル、ショーン・チュア

第7回 11月8日(日) 11:00-18:30 ※途中休憩を含む まとめの会 ゲスト:長島 確・河合千佳







教育普及プログラム インターンシップ・プログラム

Education & Outreach Internship Program

舞台芸術・文化芸術の分野で働くことを志す人材に向けた教育普及プ ログラム。今年度は座学研修やミーティングのオンライン実施など、感染 症対策に配慮しながらも多様な学びと実践の場を実現した。新しい試 みとして広報・制作部門一体型の募集を行い、双方の視点から芸術祭 の一連の流れを経験できるプログラム構成となった。

会期前は座学研修とワークショップのほか、豊島区庁舎・豊島区立中 央図書館での展示を企画段階からインターン主導で制作。全7回の座学 研修は会期前後に分けて実施され、前半は「アートNPOの運営につい て」「制作・広報・事務局の仕事」といった舞台芸術分野の基礎知識を主 なテーマとした。後半は舞台芸術の枠組みについて、またこれからの仕 事や自身のキャリアプランについて、講義とディスカッションを実施。イン ターン生からはユニークかつ具体的な発見があったという声があがった。

現場研修は実地での活動回数を抑え、各プログラムでの感染症対策 下で実施。プログラム全体を通し柔軟な対応が求められる中、インター ンはスタッフと連携しながら業務に携わった。最前線で活躍する多様な 職種・立場の講師によるレクチャーや現場でのスタッフ・アーティストと の関わりを通し、新たな人材が舞台芸術・文化芸術に対する見識を深め、 将来について考えていく機会となった。





This part of the Education & Outreach Program was aimed at people aspiring to work in the performing arts or other areas in the arts and culture sector. This year, the festival implemented a range of opportunities for learning and practical experience while keeping in mind safety during the ongoing coronavirus pandemic, including training courses and meetings held online. In a new development, rather than accepting applicants for PR and production interns separately, the program offered all participants the chance to gain perspectives on both these aspects of arts festivals.

In the first half of the internship, in addition to training sessions and workshops, participants took the lead in planning and preparing the festival's exhibition at Toshima City Office and Toshima Central Library. The seven-part training was divided in two halves. In the first, interns studied the basics of the professional performing arts, including how an arts nonprofit is run and what jobs in production, publicity, and administration entail. In the second half, interns took part in lectures and discussions about the framework of the performing arts as well as career planning and possible future jobs. Interns said that they would able to make unique and concrete discoveries.

On-site training was also held for various parts of the festival, though with measures in place to ensure safety, such as reducing the number of sessions. Having received requests for more flexibility across the program, interns carried out duties in partnership with members of the festival team. Through lectures by leading figures in a range of professionals and positions, and interacting on-site with artists and festival staff, the internship program proved an opportunity for participants to gain deeper insights into the performing arts and cultural sector as well as to think about their futures in the industry.

教育普及プログラム F/Tサポーター

Education & Outreach F/T Volunteer Supporters

F/Tを応援し一緒に盛り上げるF/Tサポーターは、毎年10代から60 代まで幅広い年齢層が参加し、現在までで500名を超える登録者が集 まっている。

今年度は新型コロナウイルス感染症対策により、現場でスタッフとと もに会場運営を行う「運営サポーター」など屋内で不特定多数と密に接 触する可能性のある活動は行わなかった。かわりにZoomを使用したオ ンラインでのワークショップや10名未満の少人数での野外での活動を 行った。 登録者:524名 参加者:47名 Registrations: 524 Participants: 47

Every year, the F/T Volunteer Supporters help in the running of the festival and attract participants of various ages, from teenagers to those in their sixties. Over 500 people to date have registrated as volunteers.

This year, as part of the measures introduced by the festival to reduce the risk of coronavirus infection, there were no volunteer activities that involved contact with the general public indoors, such as those usually undertaken by volunteers helping the festival team to run the venues. Instead, the festival organized workshops online via Zoom as well as outdoor activities with fewer than ten people.

リモートで一緒に音楽をつくろう!-身近な音を集める、組み立てる Remote Music Workshop: Gathering and Assembling Familiar Sounds

F/T公式ミュージックを作曲した東郷清丸のナビゲートで、Zoomを使 用したオンラインのワークショップを開催した。

ワークショップは缶を叩く音やドアを開け閉めする音など、身近な素材 を集め音楽作品を創作するという内容だった。私たちが普段知ることが あまりない作品としての「音楽」が生まれる瞬間やその過程に立ち合った ことで、私たちの周りに当たり前のようにある「音」と、人の手でつくりだ された「音楽」との違いについて考える機会となった。完成した作品は公 式HPでワークショップの様子とともに公開した。

Led by Kiyomaru Togo, who created F/T's official theme music, this two-part workshop was held online via Zoom. It involved creating pieces of music by gathering familiar sounds such as those of tapping a can or opening and closing a door. By witnessing the usually unknown moment and process when music emerges as a work of art, the workshop prompted participants to think about the sounds that we take for granted all around us, and how they are different from music that is made by someone. The completed pieces of music were released on the festival website along with video of the workshop sessions.

公開リハーサルに参加しよう!

Open Rehearsals for Volunteer Supporters

作品の創作過程に参加してもらう「公開リハーサルに参加しよう!」で は、『移動祝祭商店街 まばろし編』内の企画「その旅の旅の旅」と「みん なの総意としての祝祭とは」、そしてF/T × BIPAM 交流プロジェクト 『The City & The City: Divided Senses』の計3回の公開リハーサルを 行った。参加者は観客目線でアーティストやスタッフと意見交換を行い、 観劇だけでは得られない作品を深く理解する貴重な機会となった。



Three open rehearsals (for "The Journey to a Journey" and "A Festival by Everyone" from "Roaming Shopping Street Festival: Phantom Edition," and for "The City & The City: Divided Senses") were held for volunteers to give them insights into the creative process behind the festival's productions. Participants had the opportunity to share their opinions with the artists and festival team from an audience's point of view, and could gain an understanding of the productions not possible only from watching a finished performance.



Photo:泉山郎士

F/T Books

F/Tブックスは、参加アーティストによる選書・選曲をウェブに公開し、書店での展示販売を行 う恒例企画である。幅広い層にF/Tに興味を持ってもらうきっかけを作り、作品をより深く知って もらうための参考資料を周知することを目的としている。今年は「想像力」や「現在の活動に影響 を受けた本」という2つのテーマを設け、アーティストとディレクター 23名から、合計54タイトルの 本や音楽などが集まった。

小説や戯曲、学術書に漫画、YouTubeの動画まで多岐にわたるコンテンツを公式HPにコメン トとともに掲載、ジュンク堂書店池袋本店9階芸術書コーナーでフェアを展開した。 同じくジュンク堂池袋本店1階情報コーナーで展開されていたHand Saw Press『とびだせ!ガ リ版印刷発信基地』のPop-up ZINEスタンドの影響か、今年は10代から20代前半の若い年齢層 の関心を集めることができた。アーティストのコメントが書かれたPOPに惹かれ購入したという声 も多く寄せられた。

This regular part of the festival aims to help F/T reach new audiences and provide materials that can deepen understanding of the works in the program through a selection of books and music by participating artists, presented on the F/T website and also available for sale at a bookstore. This year, fifty-four books and pieces of music were collected from twenty-three artists and directors, either inspired by the theme of the imagination or examples of books that have influenced their work. Encompassing novels, plays, academic books, manga, and even YouTube videos, the wide range of content was shared on the F/T website with comments from the selectors, while the large branch of Junkudo in Ikebukuro displayed the books in its arts section.

This year attracted particular interest from younger people in their teens and early twenties, possibly due to the Pop-Up Zine Stand, which was installed on the ground floor of Junkudo as part of "Pop-up Riso Zine Studio" by Hand Saw Press. Many people said that the artists' comments on the display inspired them to buy the books.

特別協力:ジュンク堂書店 池袋本店

Special cooperation from Junkudo Ikebukuro

展示 Exhibitions

フェスティバルの会期にあわせ、豊島区庁舎内「庁舎まるごとミュージアム」及び豊島区立中央図 書館でパネルと関連書籍を展示した。

両展示ともインターン9名が3つのチームに分かれ、オンラインでのディスカッションを通じた共同 制作を行った。

「庁舎まるごとミュージアム」では、新型コロナウイルスの流行下で開催される「F/T20について知ってもらう」という全体を貫くテーマを設定し、「想像力について」「今年のプログラムについて」などそれぞれの案に沿った計20枚のパネルが制作・展示された。

図書館ではF/T20の特設コーナーが設置され、プログラムに関連した書籍の選書・配架・展示を 行った。選書は多角的な視点からプログラムを見つめ、芸術教育や地域アート、移民、ジェンダーに 関するものなど様々なジャンルから計74冊を選出した。

集まれない環境だからこその丁寧な話し合い、共有を経て実施された本展示は、多くの区民に舞 台芸術の魅力を紹介する貴重な機会となった。

Concurrently with the festival, exhibitions of displays and related publications were held at Toshima City Office (Marugoto Museum) and Toshima Central Library. For both exhibitions, interns divided into three teams and did the planning through online discussions.

At Marugoto Museum, twenty panels were produced to showcase the 2020 festival's program and theme of imaginations, and all designed to inform people about F/T20, which was taking place in the midst of the coronavirus pandemic.

At Toshima Central Library, a special corner was set up with books related to the festival. The selection of seventy-four books explored the festival's program from a wide range of perspectives, drawing from books about arts education, regional art, migration, gender, and more. Planned through a process of careful discussion and sharing of ideas because the organizers could not be in the same place together, the exhibitions were valuable ways to introduce the performing arts to many local residents in Toshima.

10.13(Tue) - 11.15(Sun) ジュンク堂書店 池袋本店 9F Junkudo Ikebukuro 9th floor



①10.1 (Thur) – 11.27(Fri) 豊島区本庁舎内「庁舎まるごとミュージアム」 Toshima City Office (Marugoto Museum) ②9.26 (Sat) – 10.22 (Thur) 豊島区立中央図書館 Toshima Central Library



収支、動員数、チケット

Earning & Expenditure / Audience Numbers / Tickets

<4-1 F/T20収支 F/T20 Earnings & Expenditure>

● 収入 Income (千円,	/ 1,000 yen units)	● 支出 Expenditure	(千円/1,000 yen units)
豊島区負担金 Toshima City	10,000	公演事業費 Productions	81,000
東京芸術祭実行委員会 Tokyo Festival Executive Committee	110,000	広報費 PR	39,000
文化庁助成金 Agency for Cultural Affairs	82,000	事務局運営費 Administration	89,030
国際交流基金アジアセンター助成金 Japan Foundation Asia Center	4,000	合計	209,030
助成金•協賛金等 Other subsidies and sponsorship	1,030	Total 	在 Correct as of February 2021
事業収入 Income from activities	1,755		
実行委員会負担金 Festival/Tokyo Executive Committee	245		
合計 Total	209,030		

2021年2月現在 Correct as of February 2021

<4-2 動員数 Audiences>

		動員数 Audience			
	プログラム数 Productions/Projects	視聴者数•再生数 Viewers/Views	来場•参加者数 Visitors/Participants	合計 Total	
上演・配信プログラム Performance & Streaming Program	13	23,004	7,333	30,985	
教育普及プログラム Education & Outreach Program	5	536	56	681	
研究開発プログラム Research Program	3	463	6	469	
連携プログラム Affiliate Program ※11/15までの公演数・来場者数	1				
合計 Total	22	24,003	7,395	32,135	

※動員数には展示、連携プログラムは含まず

Audiences for exhibitions at Toshima City Office and Toshima Central Library, or performances in the Affiliate Program not included ※オンライン参加者数を含む Includes online participants

●先行割引チケット(劇場上演演目のみ)

期間:9.9(Wed)10:00-9.12(Sat)19:00 割引率:一般前売チケットの約30%OFF。枚数限定。

4日間限定で最も安価にチケットを購入できる先行割引販売を本 年も継続実施した。

劇場公演演目2作品のうち先行割引を実施した演目は前売券が 即日完売した。観客の注目度の高さが伺える結果となった。

Early Bird Discounts (for in-person performances)

On sale: 10 a.m., September 9-7 p.m., September 12, 2020 Approx. 30% off regular advance tickets (limited availability)

Early bird discounts were once again offered on tickets for four days only. Available for the two productions performed before live audiences at theatre venues, advance tickets at the discounted rate sold out on the same day. This is a testament to audience demand for this popular scheme.

●チケットー般発売 General Tickets

劇場上演演目:9.13(Sun)10:00-11.14(Sat)19:00 オンライン配信演目:10.1(Thur)12:00-11.15(Sun)19:00

本年は演劇作品のオンライン配信というこれまでにない試みを実 施することにより、今まで劇場に足を運ぶチャンスのなかった人々 を新たな観客として開拓することができた。オンライン配信は例年 のようなセット券や学生券などの割引は行わずに1券種のみを販売 した。海外からのチケット購入者も大幅に増え、特に『Berak』の配 信チケット購入者のうち53%が海外からという結果となった。

なお、劇場公演演目については一般前売のほか学生割引・高校 生以下割引・障害者割引の各種割引のみ継続して実施し、当日券 販売においては昨年より導入したQRコード決済(PayPay)の利用も 一定数あった。新型コロナウイルス感染症対策として非接触・非対 面販売が推奨される状況が続くのであれば、来年以降も継続利用 を検討したい。

●カルチベート・システム Cultivation System

F/Tでは、未来の舞台芸術の担い手たちが知識を蓄え、経験を 積み、成長していくためのさまざまな仕組みをフェスティバルのなか に組み込んでいくことの一環として、2018年度より個人協賛を募り、 若年者向けに観劇チケットの提供や研究開発、教育普及の運営費 用に充てる「カルチベート・システム」を導入している。今年度は、劇 場の客席数(定員数)を制限していたこともあり、事前登録した若い 舞台芸術の担い手たちがF/Tのプログラムを観劇するチケットの提 供は中止。趣旨に賛同した個人から寄せられた協賛金は、研究開 発及び教育普及プログラムの運営費用に使用した。

カルチベート・システムにご協賛いただいたみなさま 栗原匡子(株式会社ガイアコミュニケーションズ)/横山義志、他4名

主催プログラムタイトル	席種	一般前売	先行割引	F/T remote	学生	高校生以下
『移動祝祭商店街 まぼろし編』	野外 F/T remote	参加無料・予約不要				
Hand Saw Press 『とびだせ!ガリ版印刷発信基地』	ZINE作成費		A4(ペラ/2つ折り)2版まで無料(ひとり1日1回まで) ※制作された原稿は印刷され次第、後日ZINEスタンドに設置されます。 ※参加方法など詳細は個別のブログラムページをご覧ください。			
ファビアン・ブリオヴィル・ダンス・カンパニー 『Rendez-Vous Otsuka South & North』	自由席		ł	参加無料·予約優先	Ē	
『神の末っ子アネモネ』	F/T remote	—	_	¥1,500	—	—
モモンガ・コンプレックス 『わたしたちは、そろっている。』	自由席 スタンディング F/T remote	¥3,500	¥2,500	¥1,500	¥2,300	¥1,000
『ムーンライト』	自由席	¥3,500	¥2,500	_	¥2,300	¥1,000
テアター・エカマトラ 『Berak』	F/T remote	—	_	¥1,000	—	—
F/T × BIPAM 交流プロジェクト 『The City & The City: Divided Senses』	自由席 F/T remote			参加無料·予約優先		
シンポジウム	F/T remote	—	-	¥500	—	—
ディレクターズ・ラウンジ	F/T remote	_	_	無料	_	—

In-person performances: 10 a.m., September 13-7 p.m., November 14, 2020 Streamed performances: 12 p.m., October 1-7 p.m., November 15, 2020

This year, the festival launched its first streaming program, enabling it to cultivate new audiences who have not previously had the opportunity to attend performances in person. For the streamed events, only one type of ticket was available, and the usual passes, student tickets, and other discounts were not offered. There was a significant increase in the number of people buying tickets from overseas, accounting for 53 percent of ticket purchases for "Berak."

For the performances held at theatre venues with in-person audiences, ticket discounts were available for students high school students and younger, and the disabled. For tickets sold on the door, many people made use of the PayPay contactless payment system, which was introduced at the festival last year. If circumstances continue to advocate the use of contactless and non-face-to-face payment methods to reduce the risk of coronavirus infection, we should consider offering PayPay again at the next festival and beyond.

As part of the festival's efforts to help the future leaders of the performing arts foster their knowledge, experience, and development, F/T introduced the Cultivation System in 2018, collecting donations from individual sponsors to provide complimentary tickets to young audiences and to cover some of the costs of the Research and Education & Outreach programs.

This year, given the restrictions in place over audience numbers for performances at theatres, complimentary tickets were not provided to young audiences registered in the system. Instead, the donations collected from individuals were used solely for organizing the Research and Education & Outreach programs.

Cultivation System Sponsors (in alphabetical order) Kyoko Kurihara (GAIA Communications Inc.), Yoshiji Yokoyama, and 4 others

※チケット料金には消費税が含まれます。



<広報・宣伝方針 Publicity & Promotion Policy>

新型コロナウィルスの感染拡大、それに呼応して起こる社会や市民感 情、メディア情勢の変化を予測しながら開催したF/T20の広報・宣伝は、 イレギュラーな状況に対応すべくこれまで以上の柔軟性が求められた。 例年5月頃に行う開催発表は7月に延期を余儀なくされた。また、新型 コロナウィルスの影響で特に海外プログラムの実施が危ぶまれるなど、 プログラムの進捗状況を見守りながら短期間でPR活動をすることとなっ たため、PRツールとして動画配信などのオンラインを積極活用し、さら に広告出稿もウェブを中心に行った。F/Tとして初となるオンラインライ プ配信型の演目発表会は、プレス関係者だけではなく一般視聴者にも 公開され再生数が700回を超えた。

また、公式ウェブサイト上にはオンラインで鑑賞可能なプログラムを 集めた「F/T remote」ページを開設。SNS発信などのコミュニケーショ ン効率を高めるとともにF/Tの動画配信のブランド化を目指した。

アートディレクションは2019年から継続してAllright Graphicsの高田 唯が務めた。今年度のテーマである「想像力どこへ行く?」を象徴するメ インビジュアルが広報の核となり、コロナ禍でも芸術の可能性を感じさ せる各プランが実施された。 Given that F/T20 was taking place while the coronavirus was spreading, and amid shifts in society, the public mood, and the media in response to the pandemic, greater flexibility than ever before was required for publicizing and promoting the festival in order to adapt to these irregular circumstances. The lineup announcement that usually takes place around May was forced to postpone until July. The festival engaged in publicity activities on a short-term basis while closely monitoring the fluid situation with the planned productions and events, not least the problems posed to bringing overseas productions to the festival because of the coronavirus. Accordingly, the festival made proactive use of online tools like video streaming, and advertised primarily online. The press conference announcing the festival programs was held for the first time in an online format, meaning it was open not only to the media but also regular members of the general public, and the streamed video achieved over 700 views.

The festival website included a special F/T remote page, bringing together the productions and events available for viewing online, with the aim of improving communication via social media and of establishing a brand for the festival as a place to stream videos.

Art direction was once again handled by Yui Takada of Allright Graphics, following on from the 2019 festival. The key visual symbolizing the festival theme of "Whither Imaginations?" became a central part of the publicity, and various plans were implemented that gave a sense of the possibilities for art even during the coronavirus pandemic.

<新ロゴ・メインビジュアル New Logo & Key Identity>

F/T20ロゴおよびメインビジュアルは、高田がF/T19で目指した 「何かにしがみつくことのない、動きのある、変化を受け入れられる 流動性のあるロゴ」を継承した。また、テーマの「想像力どこへ行 く?」から連想される"国境なんて関係なく、行きたい時に、行きた いところに飛んでいく鳥"をシンボルにした。このメインビジュアルは 静止画の他に、東郷清丸によるオリジナル音楽と合わせたモーショ ン・タイプも2パターン作成。イラストレーターの芳賀あきなによる2 種の鳥は、F/Tのアイデンティティであるスラッシュ(/)を跨ぎ、人が 鳥に、鳥が人に変化し、F/Tや舞台芸術を通して想像力の枠が大き く広がっていく様子を表した。またシンボルカラーとなったクリアで 濃い青の背景と対照的な白の鳥は、舞台芸術ならではの可能性を視 覚・感覚的に表している。不安な時代の中でも希望が感じられるビ ジュアルとなった。

For the 2020 festival's logo and visual identity, Takada continued with the design concept that he started in 2019, aiming to express something that is hard to grasp, that is fluid and has movement, and that is open to change. Taking inspiration from the festival theme of "Whither Imaginations?," he chose the symbol of a bird that flies to where it wants to go, whenever it wants to go there, regardless of national borders. This key visual was produced as a still image as well as two types of montages with original music by Kiyomaru Togo. Separated by the slash that is part of the festival's visual identity, and morphing from human to bird, and from bird to human, the two types of bird images created by illustrator Akina Haga expressed how the frames around our imaginations are expanding through F/T and the performing arts. Set against a clear yet vividly blue backdrop serving as the signature color, the white birds visually and intuitively represented the unique possibilities of the performing arts. In this way, the visual design for the festival conveyed a sense of hope in these uncertain times.

アートディレクション:高田 唯Art Direction: Yui Takadaイラスト:芳賀あきなIllustrator: Akina Haga音楽:東郷清丸Music: Kiyomaru Togoデザイン:齋藤拓実Design: Takumi Saitoデザインコーディネーター:高田舞Design Coordinator: Mai Takada







<宣材 Publicity Materials>

新型コロナウィルスの影響でプログラム情報の確定に例年以上の時 間をかけたため、毎年作成しているブックレットの発行を中止した。昨 年に引き続きメインビジュアルを用いたチラシやポスター、タブロイド紙 の他、新たに活版印刷によるポストカードを作成した。タブロイド紙は2 種のメインビジュアルを表紙・裏表紙に用い、2つのビジュアルを生かす デザインとなった。

各宣材の配布はこれまでと同規模の劇場折り込みが困難な状況と なったが、F/Tに住所を登録しているDM会員への郵送や都内の文化施 設やカフェ、美容院などに配置した。また豊島区を中心としたタブロイ ド紙のポスティングを昨年より拡大し、F/Tや舞台芸術のコアなファン 層と劇場に足を運ぶ機会の少ない層の双方へアプローチを行った。

昨年に引き続き西武池袋本店に懸垂幕を掲出。池袋駅東口・西口双 方のデジタルサイネージでのCM放映とともに、国内屈指の乗降客数で ある池袋駅でフェスティバルを印象付ける効果的なPRを演出した。

	仕様 Format	配布期間 Distribution Period	印刷部数 Print Run
ポスター Poster	B2, B1	7月中旬~会期中	1,118
ポストカード (DM) Postcard	A4変形 Variant A4	7月中旬~会期中	5,000
F/T20 チラシ F/T20 Flyer	A4両面 Double-sided A4	9月上旬~10月上旬	46,000
タブロイド Tabloid Flyer	タブロイド判 4ページ / 8ページ仕上がり2ツ折り	10月上旬~会期中	140,000
各演目チラシ Production Flyer	各演目による Varied per production	10月上旬~会期中	3,000~10,000
当日パンフレット Performance Pamphlets	A5 仕上がり3ツ折 A5, triple fold	各演目上演期間中	5,050







Since the uncertainty ushered in by the coronavirus meant that confirming the program details took longer than usual, the booklet published by the festival each year was not made for the 2020 festival, but flyers, posters, and tabloid-sized flyers were produced using the key visual as well as letterpress-printed postcards. The tabloid flyers were printed on the front and reverse with two versions of the key visual, resulting in a design that harnessed two different looks.

The circumstances made it difficult to distribute publicity materials to theatres to the same extent as previously, though they were sent to the addresses of people registered on the mailing list as well as circulated to cultural facilities, cafes, and hair salons in Tokyo. The tabloid flyers were posted mainly in the Toshima area and more extensively than last year. In this way, the festival adopted approaches that targeted both audiences who regularly attend F/T and performing arts events as well as audiences who rarely go to theatres.

Like with the 2019 festival, banner advertising was hung on the outside of Seibu Ikebukuro Department Store, while a commercial played on digital signage at two entrances to Ikebukuro Station. As such, the publicity campaign was effective at leaving an impressive about the festival on people using Ikebukuro Station, which is one of the busiest train stations in Japan.



<ウェブサイトおよびSNS Website & Social Media>

近年情報発信の要として最も重要となっているインターネットメディア は、新型コロナウイルス感染症対策に揺れる社会情勢の中でこれまでよ りもさらに重要な存在となった。F/T20メインビジュアルのモーションを トップページに配置した印象的なデザインのF/T20公式ウェブサイトは、 上部のグローバルナビ(各ページに共通で設置されている案内メ ニュー)の要素を絞り、洗練されたデザインとユーザビリティの高さの双 方を目指した。新型コロナウィルス対策として配信プログラムが増えるこ とを予想し、配信プログラムのみを集めたページをオンライン会場「F/T remote」として位置付けたことも、今年ならではの戦略であった。

Twitter、Facebook、InstagramなどのSNSだけでなく、情報発信と プログラムの配信の手段としてYouTubeチャンネルをこれまで以上に活 用した。チャンネル登録者も昨年から600人以上増え2580人となった。 F/T20ではPR動画やトークなど40の動画を配信し、これらの総再生数 は20,718*となった。過去F/Tのコンテンツも含めると2020年の総再生 数は257,105回となり、視聴者の居住エリアは日本以外のアジア圏が多 い。オフラインでの上演が難しい時代でも、エリアを問わずにプログラム や情報を届けられる可能性を強く感じる結果となった。

※2020年12月末日時点

Having already become in recent times the most important way to disseminate information, online media has proved even more indispensable during the volatile social conditions caused by the coronavirus pandemic.

The F/T20 website employed a striking design with an animated version of the key visual on the home page. The elements in the global navigation (the guidance menus shared across all pages on the website) were reduced, aiming for a more refined design and enhanced usability. In anticipation of an increased number of streamed performances due to the coronavirus making in-person performances unrealistic, F/T remote was set up as its own section of the website introducing all the videos that were available to watch. In this way, it became an online "venue" in its own right and a strategy very particular to the year's circumstances.

The importance of social media like Twitter, Facebook, and Instagram is ever more apparent, but 2020 saw the festival especially make use of its YouTube channel as a means of disseminating information and streaming videos. This boosted the channel subscribers from over 600 to 2,580. In total, the festival streamed forty videos, including promotional videos and talks, and which cumulatively received 20,718* views. Including video content from previous editions of the festival, the total number of views on the channel for 2020 was 257,105. It is also notable that many of viewers watched from other parts of Asia. In a time when performing to an in-person audience is difficult, these results gave a strong sense of the potential to deliver festival content and information regardless of location.

*Correct as of the end of December 2020

	F/T20 (8/6~12/31)	会期中(10/16~11/15)
セッション数 Sessions	102,866	51,140
PV数 Page Views	224,486	94,686
—訪問あたりPV数 Pages Views per Visit	2.91	2.74
平均セッション時間 Average Session Length	0:02:54	0:02:41
平均ページ滞在時間 Average Time on Page	0:01:33	0:01:39

Facebook いいね数 Facebook Likes: 7.217 (前年 +452) Twitter フォロワー数 Twitter Follows: 10,064 (前年 +11) YouTube チャンネル登録者数 YouTube channel subscribers: 2,646 (前年 +626)



教育メディーカンプ 2018.08.09.00 10.00 mm

<掲載実績、広報費換算 Press Coverage Results & Advertising Value>

総数:410件 Total: 410	
雑誌 Magazines	10件
新聞・フリーペーパー・書籍 Newspapers/Freesheets/Books	15件
電波 Broadcasting	5件
WEB Online	381件

広告費換算額:13,000万円 ※2021年2月現在 Equivalent advertising value: approx. ¥130,000,000. Correct as of February 2021



としまテレビ「としま情報スクエア」収録風景

<F/T20 オンライン演目発表会 F/T20 Online Press Conference>

F/T20 オンライン演目発表会

7.10(Fri) F/T remote(オンライン会場)

前年度に豊島区庁舎で実施したプレス向けの演目発表会を、今年度 はF/T実行委員会事務局内のスタジオから広く一般視聴者に向けてラ イブ配信した。会場からの参加が難しい国内アーティストの各拠点を生 中継し、プログラムの紹介や質疑応答を行った。また、海外アーティスト からのビデオメッセージも紹介した。各プログラムの内容を伝えるだけ ではなく、コロナ禍においてもフェスティバルを実践していく決意を表明 する場となった。



<海外広報 Overseas PR>

国際芸術祭であるF/Tでは日本語を母語としない観客のアクセシビ リティや海外関係者への情報提供を重視している。具体的には公式 ウェブサイトやメールマガジンの日英併記、英語版SNSの運用などであ る。新型コロナウイルス感染症により国境を越えた渡航が困難な状況 を受け、F/Tは広報活動の見直しを迫られた。しかし世界中からアクセ ス可能な配信プログラムが増加したため、海外広報はこれまでより重要 となった年ともいえる。

日本語の他、英語や中国語など多言語字幕付でオンライン配信され た『Berak』は、配信チケットの購入者の約半数が海外からであった。一 方で反省点もある。『わたしたちは、そろっている。』では、システム上の 問題で海外からの配信チケット購入に対応できなかった。また専門家と ディレクターを交えたシンポジウムでは、観客と登壇者双方向の同時通 訳に課題が残った。チケット販売や配信、多言語サポートなど、国際芸 術祭として、オンラインで展開するプログラムを高いクオリティで視聴者 (観客)に提供するべく、引き続き検討し善処していきたい。

- FY	Carly Brd Discounts, General Tickets, Student Tickets Student Stickets Students and the table researching and portaging ages. Stude Theorem for specification or even.
	B Server the type of sease set threads the passe relation of search as well as low and and the set of set of search set of se
Status 12 Ar (24 and 24 ar (24 ar (
In the control from the intervention of the static of the transmission of the static of the transmission of the static of t	



F/T20 Online Press Conference 7/10(Fri) F/T remote (available online)

Held last year at Toshima City Office for invited members of the media, the main press conference announcing the festival lineup was this year streamed live from the F/T office for general viewers. The event introduced the festival's productions and offered people the chance to ask questions. Artists in Japan who could not attend in person instead spoke live from their respective locations, while overseas artists recorded video messages in advance. Not simply an event for presenting the content of the festival programs, the press conference was an opportunity to show how the festival can be held even in the midst of the coronavirus pandemic.

In order to reach general audiences and industry professionals who do not speak Japanese, Festival/Tokyo provides information in English on its website, newsletter, and social media channels. Held in a year when international travel was extremely difficult, F/T20 inevitably had to rethink its publicity approaches. Nonetheless, because the festival was presented partly online, it actually became more accessible to global audiences than ever before.

"Berak," which streamed with subtitles in multiple languages (including Japanese, English, and Chinese), attracted particularly strong interest from viewers based internationally, who accounted for around half of ticket sales. However, some parts of the online program had issues. "Momonga Complex" was ultimately available only to viewers in Japan due to the streaming system, which did not accept people paying and viewing outside the country. Despite having overseas guests and streaming online. interpretation for the symposium was only available for viewers in Japanese. As an international festival, we need to continue considering how accessible we can make online programs for all audiences.





<ウェブマガジン「F/T Focus」 F/T Focus Online Magazine>

F/Tのプログラムを多角的に味わうためのウェブマガジン「F/T Focus」。2016年の発 行開始からこれまで100本以上の記事を掲載している。今年度は緊急事態宣言下で行っ たディレクターへのインタビューにはじまり、参加アーティストのインタビューやゲストとの 対談、公演レビューなど、会期終了後も記事掲載を継続している。過去のF/Tに関する 記事も読まれていることに加え、訪問者によるSNSのシェアが活発に行われている点が 特徴といえる。なかにはFacebookで270件以上シェアされた記事もあった。「F/T Focus」は公演情報の入手だけにとどまらず、記事コンテンツを楽しみ、共有するサイトと して活用されている。

F/T Focus is an online magazine that offers audiences various content for getting more out of the festival. Since its launch with the 2016 festival, it has published over a hundred articles. For F/T20, the magazine continued to publish content until the end of the festival, starting with an interview with the F/T directors conducted in the spring during the state of emergency, and followed by interviews with artists, a discussion between two artists, and reviews. In addition to reading articles about this year's and previous editions of the festival, visitors actively shared the content on social media, with one article receiving over 270 shares on Facebook. In this way, the magazine serves not only as a means of obtaining information about events at the festival but also as a platform for reading and sharing interesting content in its own right.



URL < https://www.festival-tokyo.jp/webmagazine.html >

【インタビュー】都市の祭りが果たす役割 F/Tディレクターインタビュー<前編> 長島 確・河合千佳 (インタビュー・文:萩原雄太)

【インタビュー】想像力は移動できる F/Tディレクターインタビュー<後編> 長島 確・河合千佳 (インタビュー・文:萩原雄太)

【インタビュー】"権力"を考える~これからの10年に必要な約束 西尾佳織(鳥公園)インタビュー 西尾佳織(鳥公園) (インタビュー・文:河野桃子)

【インタビュー】個人の声が街を変え、公共空間を作る -----2年目のガリ版印刷発信基地 Hand Saw Press (インタビュー・文:野中モモ)

【インタビュー】人が集まれない時代に、舞台美術家はいかなる「景」を生み出すのか ----セノ派・杉山至インタビュー セノ派・杉山 至 (文:もてスリム 撮影:鈴木 渉)

【インタビュー】リアリティとの戯れ――ファビアン・プリオヴィルの世界 ファビアン・プリオヴィル (インタビュー・文:武藤大祐)

【インタビュー】ばらばらでいながら、そろう。 ——白神ももこインタビュー 白神ももこ (取材・文:住吉智恵/撮影:鈴木 渉)

【インタビュー】自死と病を問う新たなる映像作品『Berak』 ----タブーを越え、分かり合うために モハマド・ファレド・ジャイナル、シャーザ・イシャック(テアター・エカマトラ) (インタビュー・文:落 雅季子) 【インタビュー】「東京は汚いものを隠す街」 アーティストの五感が捉えた東京とバンコク 櫻内憧海、曽根千智、渡邊織音 (文:萩原雄太/撮影:鈴木 渉)

【インタビュー】よりシンプルにわかりやすくなっていい。 ---村川拓也インタビュー 村川拓也 (聞き手・構成:宮崎敦史/撮影:鈴木 渉)

【インタビュー】 混乱の時代に"祈り" を届けるために ——『神の末っ子アネモネ』演出家キム・ジョンインタビュー キム・ジョン (文:河野桃子)

【インタビュー】作品と観客をつなぐ"契約"のために舞台美術ができること -----セノ派・佐々木文美インタビュー セノ派・佐々木文美 (文:もてスリム/写真:泉山朗土)

【レビュー】ささやかで力強く生を肯定する宣言 モモンガ・コンプレックス『わたしたちは、そろっている。』 (文:岩渕貞太 /写真:三浦麻旅子)

6 来場者アンケート Audience Questionnaire

例年F/T会場で用紙を配布し回答を呼びかけていた来場者アンケート だが、今年は新型コロナウイルス対策としてウェブによる回答のみを日本 語・英語双方で募った。公式ウェブサイトやSNSで告知した他、劇場など の会場ではアンケートフォームへ誘導するQRコードを掲示した。さらにチ ケット購入者や参加予約者にはメールを送付し回答を依頼した。また回 答協力者へは謝礼としてオリジナル・ポストカードを送付するなど、非対面 でも幅広い層から回答を収集する工夫をしたところ157件が集まった。

プログラムの満足度は「とても満足」と「満足」の合計が89.8%と高い数 値となった。演目別の回答者数は『Rendez-Vous』が最も多く、『わたした ちは、そろっている。』『神の末っ子アネモネ』と続いている。「来年も同様 のプログラムに参加したい」は82.2%であった。

来場者の属性は年代別に見ると30代が27.4%と最も多く、続いて20代 が24.8%となっている。居住エリアは遠方からの移動が難しかった状況が 反映されており、最多が東京の58.6%だった。他方国内では北海道から沖 縄まで幅広いエリアから、さらに海外からの回答もあった。以上の結果は オンライン配信演目によって居住地に関係なくプログラムに参加できた事 を示している。

情報の入手経路としてはF/TウェブサイトとSNSが合わせて59.2%となっ ており、昨年最も多かったチラシを大きく上回った。来場の理由では、「演 目・企画への興味・関心」の72.0%が「F/Tへの興味・関心」の49.7%や「出 演者・演出家などつくり手への興味・関心」の41.4%を上回った。ウェブを通 じたプログラムの告知が効果的な広報手段であったことが推察できる。



●ご来場の理由を教えてください Why did you attend Festival/Tokyo?



The questionnaire distributed to audiences at F/T venues each year was changed to an online format as an anti-coronavirus measure, and responses were collected in both Japanese and English. In addition to sharing the link to the online questionnaire on the festival website and social media channels, a QR code was displayed at the festival venues that provide direct access to the questionnaire form. Emails were also sent to people who had bought tickets or made reservations, encouraging them to complete the questionnaire. An original postcard was sent to respondents in Japan to thank them for their cooperation. Employing these various approaches to encourage audiences to give their feedback remotely, the festival collected 157 responses.

The level of satisfaction in the festival's events and programs was 89.8% (the combined total of "very good" and "good" responses). When separated by production or event, the number of responses for "Rendez-Vous" was the highest, followed by "We assemble together" and "Divine Daughter Anemone." The percentage of respondents who said that they wanted to attend a similar event next year was 82.2%.

Examining audiences by age, the most numerous age group was audiences in their thirties (27.4%), followed by those in their twenties (24.8%). Reflecting the situation this year whereby it was difficult to travel to the festival from faraway, most audiences lived in Tokyo (58.6%). Nonetheless, responses were received widely, including from Hokkaido in the far north of Japan to Okinawa in the south, and also from outside the country. This indicates that people were able to watch events online regardless of where they lived.

Audiences obtained information about the festival mostly through online platforms, with the festival website and social media combined accounting for 59.2% of responses, which was significantly higher than last year's most common means (flyers). Many audiences said that they had wanted to attend the festival due to an interest in the event or project, which, at 72%, was higher than those who had a general interest in F/T (49.7%) or in the performers, directors, or other creators (41.4%). This would seem to indicate that promoting specific events and projects through online platforms proved an effective means of publicizing the festival.

公演を何でお知りになりましたか How did you hear about the event?



開催概要、クレジット一覧 Festival Outline & Credits

フェスティバル/トーキョー実行委員会

顧問	野村 萬
	(公社)日本芸能実演家団体協議会会長 能楽師
名誉実行委員長	高野之夫 豊島区長
実行委員長	福地茂雄
	(公財) 新国立劇場運営財団 顧問
	(公社) 企業メセナ協議会 顧問 アサヒグループホールディングス株式会社 社友
司由行手모토	
副実行委員長	市村作知雄 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 顧問
	藤田 力 豊島区文化商工部長
	小澤 弘一 (公財)としま未来文化財団 事務局長
委員	尾崎元規 (公社)企業メセナ協議会 理事長、 花王株式会社 顧問
	熊倉純子 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科 教授
	中田雅史
	アサヒグループホールディングス株式会社
	日本統括本部 事業企画部 理事
	渡邊裕之 東京商工会議所豊島支部 会長
	永井多恵子 (公財)せたがや文化財団 理事長
	小倉 桂 豊島区文化商工部文化デザイン課長
	蓮池奈緒子
	(公財)としま未来文化財団
	あうるすぽっと(豊島区立舞台芸術交流センター)支配人
	米原晶子 NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	長島 確 フェスティバル/トーキョー ディレクター
	河合千佳 フェスティバル/トーキョー 共同ディレクター
	葦原円花 フェスティバル/トーキョー 事務局長
監事	能登絹子 豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登 (骨董通り法律事務所)

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局 ディレクター 長島 確 共同ディレクター 河合千佳 事務局長 蓋原円花 藤島麻希、嶋田敬介、柚木桃香、鈴木千尋、藤井友理、 制作 長田崇史、山縣昌雄、猪狩裕子、岩間麻衣子、 植松侑子(合同会社syuz'gen)、金井美希、司田由幸、 萩谷早枝子、宮内芽依、宮武亜季、 宮本晶子(合同会社syuz'gen) コミュニケーションデザイン(広報/教育普及)チーフ 小倉明紀子 コミュニケーションデザイン(広報/教育普及) 名取萌音、岡野乃里子、細川浩伸 コミュニケーションデザイン(広報/教育普及)アシスタント 森川清成、植田あす美 票券チーフ 武井和美 涉外 太田志保 経理 提 久 美子 五藤 真、中山恭一(株式会社countroom) 総務 米原晶子 技術監督 寅川英司 照明コーディネート 木下尚己(株式会社ファクター) 音響コーディネート 相川 晶(有限会社サウンドウィーズ) アートディレクション 高田 唯 (Allright Graphics) デザインコーディネーター 高田 舞 (Allright Graphics) デザイン 山田智美、齊藤拓実 (Allright Graphics) イラスト 芳賀あきな 音楽(PR動画) 東郷清丸 (Allright Music) PR動画 ダイノサトウ

相澤 俊(Mtame株式会社)

鈴木理映子

ウィリアム・アンドリューズ

Festival/Tokyo Executive Committee

Advisor: Man Nomura (Chair, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations; Noh actor) Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano (Mayor of Toshima City) Chair of the Executive Committee: Shigeo Fukuchi (Advisor, New National Theatre Foundation; Advisor, Association for Corporate Support of the Arts; Senior Alumnus, Asahi Group Holdings, Ltd.) Vice Chairs of the Executive Committee: Sachio Ichimura (Advisor, NPO Arts Network Japan) Chikara Fujita (Director, Culture, Commerce and Industry Division, Toshima City) Koichi Ozawa (Administrative Director, Toshima Mirai Cultural Foundation) Committee Members: Motoki Ozaki (President, Association for Corporate Support of the Arts; Corporate Advisor, Kao Corporation) Sumiko Kumakura (Professor, Graduate School of Global Arts, Tokyo University of the Arts) Masashi Nakata (Senior Officer, Business Planning Department, Japan Headquarters, Asahi Group Holdings, Ltd.) Hiroyuki Watanabe (Chair, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima) Taeko Nagai (Chair, Setagaya Arts Foundation) Kei Ogura (Director, Cultural Design Section, Culture, Commerce and Industry Division, Toshima City) Naoko Hasuike (Toshima Mirai Cultural Foundation; Executive Director, Owlspot Theatre/Toshima Performing Arts Center) Akiko Yonehara (Representative, NPO Arts Network Japan) Kaku Nagashima (Director, Festival/Tokyo) Chika Kawai (Co-Director, Festival/Tokyo) Madoka Ashihara (Administrative Director, Festival/Tokyo) Supervisor: Kinuko Noto (Director, General Affairs Section, General Affairs Division, Toshima City) Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Festival/Tokyo Executive Committee Secretariat Director: Kaku Nagashima Co-Director: Chika Kawai Administrative Director: Madoka Ashihara Production Coordinators: Maki Fujishima, Keisuke Shimada, Momoka Yunoki, Chihiro Suzuki, Yuuri Fujii, Takashi Osada, Masao Yamagata, Yuko Igari, Maiko Iwama, Yuko Uematsu (syuz'gen), Miki Kanai, Yoshiyuki Shida, Saeko Hagiya, Mei Miyauchi, Aki Miyatake, Shoko Miyamoto (syuz'gen) Communication Design Director (PR, Education & Outreach): Akiko Ogura Communication Design (PR, Education & Outreach): Mone Natori, Noriko Okano, Hironobu Hosokawa Communication Design Assistants (PR, Education & Outreach): Kiyonari Morikawa, Asumi Ueda Ticket Manager: Kazumi Takei Liaison Officer: Shiho Ota Accounting: Kumiko Tsutsumi, countroom inc.(Makoto Gotoh, Kyoichi Nakayama) Administrator: Akiko Yonehara Technical Director: Eiji Torakawa Lighting Coordinator: Naoki Kinoshita (Factor Co., Ltd.) Sound Coordinator: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.) Art Director: Yui Takada (Allright Graphics) Design Coordinator: Mai Takada (Allright Graphics) Design: Tomomi Yamada, Takumi Saito (Allright Graphics) Illustrator: Akina Haga PR Video Music: Kiyomaru Togo (Allright Music) Publicity Video: Dino Sato Website: Shun Aizawa (Mtame, Inc.) Overseas Public Relations, Translation: William Andrews Copywriting: Rieko Suzuki

■開催概	要
名称	フェスティバル/トーキョー20
会期	令和2(2020)年10月16日(金)~11月15日(日)
会場	東京芸術劇場、トランパル大塚、豊島区内商店街、
	F/T remote(オンライン会場) ほか
主催	フェスティバル/トーキョー実行委員会
	豊島区/公益財団法人としま未来文化財団/
	NPO法人アートネットワーク・ジャパン、
	東京芸術祭実行委員会〔豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、
	フェスティバル/トーキョー実行委員会、公益財団法人東京都歴史文
	化財団(東京芸術劇場・アーツカウンシル東京)〕
「トランス」	フィールド from アジア」助成 国際交流基金アジアセンター
	アジア・文化創造協働助成
劦賛	アサヒグループホールディングス株式会社
後援	外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、
	J-WAVE 81.3 FM
寺別協力	西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、
	サンシャインシティ、ジュンク堂書店 池袋本店、
+ +	理想科学工業株式会社、星野リゾート OMO5東京大塚
劦力	東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、
	豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、
	 一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、 池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人ゼファー池袋まちづくり、
	池袋四口間店街連合会、将定非営利活動法人でノアー池袋よらつくり、 ホテルメトロポリタン、ホテルグランドシティ、池袋ホテル会、
	ホテルメトロホリダン、ホテルクラントンティ、池袋ホテル会、 サンシャインシティプリンスホテル、ホテルリソル池袋
宣伝協力	
0	令和2年度 文化庁 国際文化芸術発信拠点形成事業
文八斤	
	フェスティバル/トーキョー 20は東京芸術祭2020の
	一環として開催いたしました。
四 際7-ト	Defendional City of Arts & Culture **かりチャー都市としま ANJ Art COSHIMA MIRAL CULTURE LOOMANION ANJ Art
	Geidankyo J-WAVE 81.31
Sun	Shine City ジュンク堂書店 JUNKUDO 単語 単語の 星野り
	HOTEL METROPOLITAN TOTO REMARKO JACAT
	文化でつながる。本義とつながる。 THE FUTURE IS ART

ウェブサイト

作品紹介文

海外広報·翻訳



Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in fiscal 2020

Festival/Tokyo 2020 is organized as part of Tokyo Festival 2020.



フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局 〒171-0031東京都豊島区目白5-24-12 旧真和中学校4F TEL > 03-5961-5202 FAX > 03-5961-5207

Festival/Tokyo 4F 5-24-12 Mejiro, Toshima-ku, Tokyo 171-0031 Japan Tel>+81-(0)3-5961-5202 Fax>+81-(0)3-5961-5207

発行 > フェスティバル/トーキョー実行委員会 Festival/Tokyo Executive Committee

 アートディレクション> 高田 唯 (Allright Graphics)
 デザイン> 齋藤拓実 (Allright Graphics)
 デザインコーディネーター > 高田 舞 (Allright Graphics)
 編集 > 小倉明紀子、岡野乃里子、名取萌音 (フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局)
 編集協力 > 深沢祐一

Art Direction > Yui Takada (Allright Graphics) Design > Takumi Saito (Allright Graphics) Design Coordinator > Mai Takada (Allright Graphics) Editors > Akiko Ogura, Noriko Okano, Mone Natori (Festival/Tokyo Executive Committee Secretariat) Editorial Support > Yuichi Fukazawa





FESTIVAL / TOKYO

禁・無断転載 ©フェスティバル/トーキョー実行委員会 https://www.festival-tokyo.jp